紀伊國名所圖會

二之巻

海部郡

ル4
325
3

紀伊國名所圖會巻之三目録

高松茶屋
弥勒寺山
雑賀浦
雑賀崎浦　蜑巣巌　袖洛岩
五百羅漢寺
鶴立嶋
甲寄
芦辺浦
和歌江
望海楼
妹背山　経王堂　海禅院　多宝塔　唐門　隅門　経蔵
妹背海苔

根上り松
雑賀合戦
梅渓翁宅址　教如上人巌
秋葉大権現　観音堂　経塚　望海楼
芦辺寺旧址
弁財天社
片男の芦
養珠寺　本堂　持仏堂　二天門　大黒天　一切経蔵　書院　林泉　思ひ井
芦辺茶屋
崖の祠

延寿院　愛宕権現　光明院
観口石
釣岩
矢宮　経石　春日　念仏堂　西宮　稲荷　弘法大師　鳥居　除神札
小町峯
宗祇松
芦辺因祠
三断橋
奥洗岩

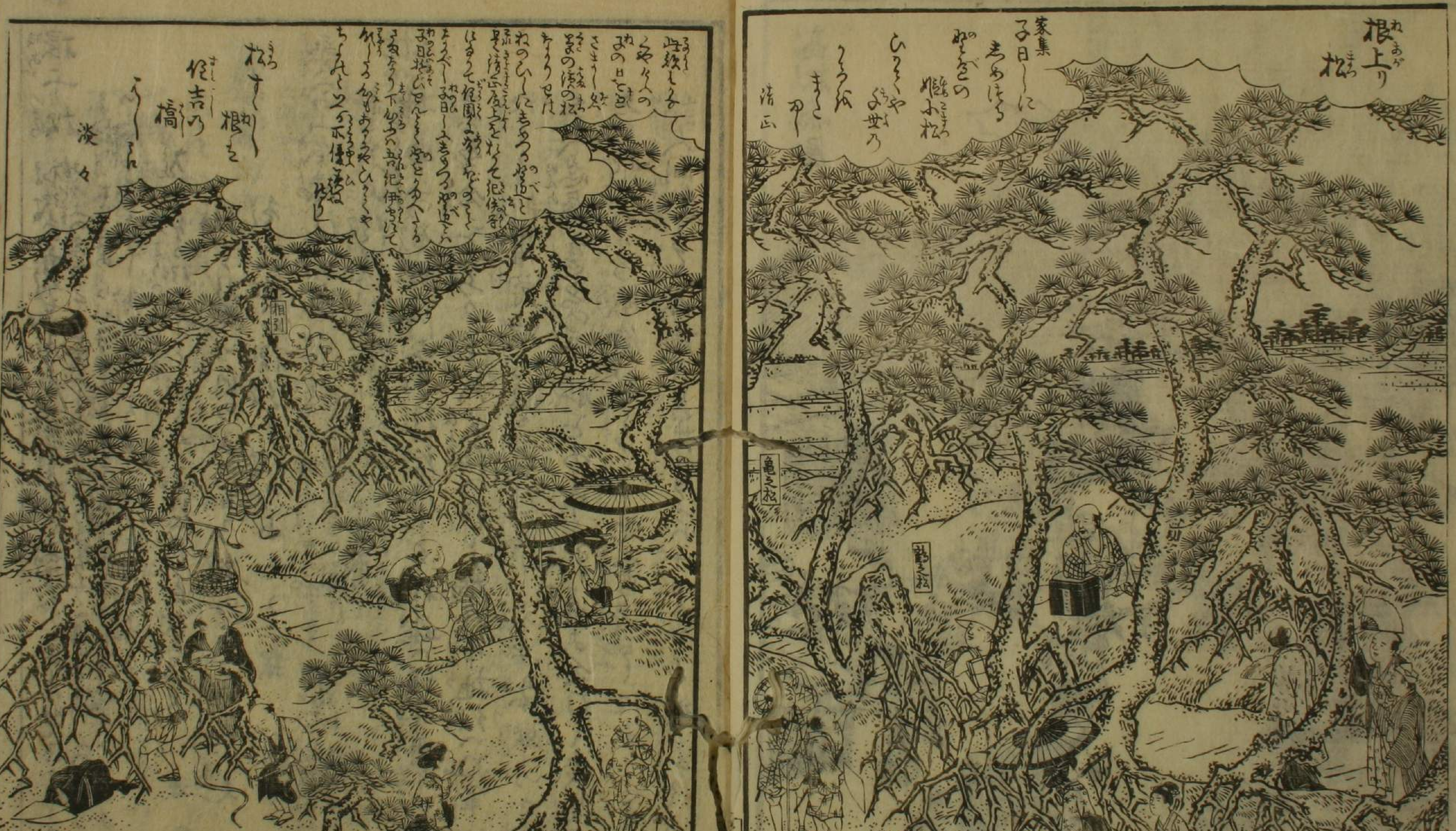
雑賀野　地蔵院　稲荷
小江浦
亀遊巌
蛭の宮
宗祇瀬
雑賀城址
妙見堂
郭公祠
観海楼
独鈷盤

門 呂 弥 325 巻 3

四條大納言旧跡
岩根薄
和歌松原
天満宮
浦の初嶋

玉津嶋神社 祢宜舎 石系 宝庫 津守国基霊社
臘山
箱山
東照宮 拝殿 護摩堂 唐門 薬師堂 神楽所 開山堂 楼門
和歌浦 仲霞明神 網引

玉出島 千珠満珠 生浦
大相院 三重浮図塔 鎮守天神
東照宮御旅所


根上り松
家集
清正
亀之松
淡々

根上り松

[illegible]の南部七八丁ばかりに此地の[illegible]其根[illegible]あらはれて[illegible]松[illegible]根[illegible]あがりて[illegible]千代は根[illegible]

汐ふりや いつのよの日乃影のこゝろ　源安定

なりの巣や根あがり松の小くゝり　京　丈石

[illegible]　牛[illegible]

愛宕山多珠院清雲寺

地蔵院 [illegible]

本尊愛宕大権現 [illegible] 根本山の本殿に阿太子権現にして 神妙に[illegible]特冊する地蔵 宮参[illegible]と名る[illegible]修羅闘浄の瞋恚と降伏し 天平安寧の守護と くに忍辱慈悲の[illegible]とおかし 利益あるなわく衆生を[illegible] 毒なる大ふの威徳[illegible]して 霊験日ましにおいく 諸人間釣して毎歳六月廿四日より千日参とて[illegible]

近郷の力者集會して花角力とありて殊に山上風景の勝境なる 西には蒼海漫々として阿波の二国は眉のごとく眼下にあり 峰上の[illegible]小江の浦沖に鎮むる淡路小松[illegible]に見る人業まで 白渡る名白乃御坂名草山三着の藻塩やく[illegible]

弥勒寺山

[illegible]

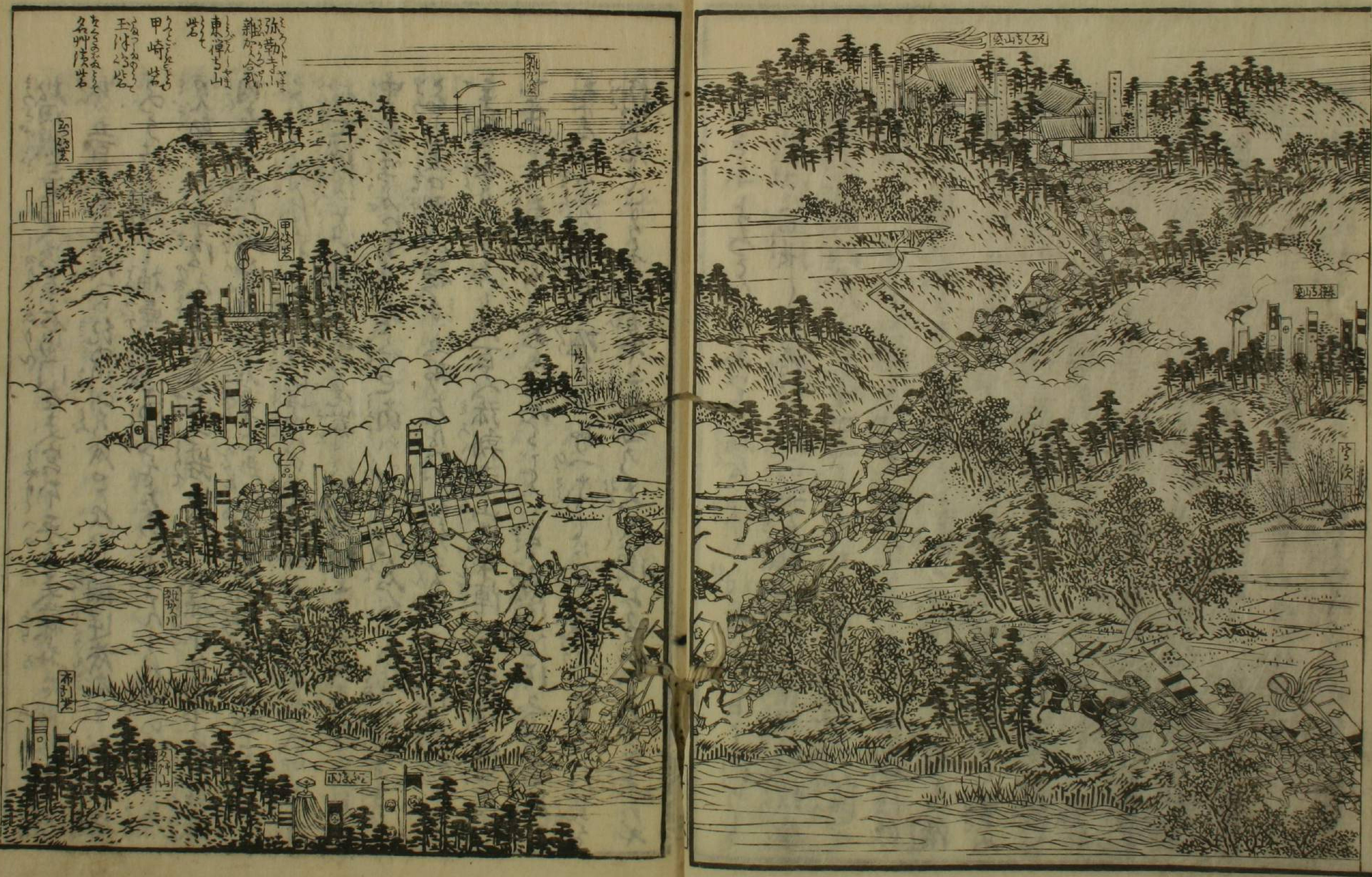
雑賀躍来由之事

さるにかの織田内府信長公には偏に日蓮派の僧徒日乗上人が偏執の誹謗を信じ 元亀元年九月十三日はじめて大坂石山を攻て法園の門徒ことごとく蜂起して 雑賀[illegible] いまだかつてあらざるもののもなく合戦さかんにして[illegible]あると[illegible]

圓珠院
愛宕権現
去来

信長公ハかねてかく叛結ようり軍馬をとゞめしむかへ心底ちく
浅井佐々木朝倉なんどの強敵すら既ふことく攻亡しぬれ
ともいかなる要害堅固の城なりとも不日に落ざるところ
あらざるに石山の御堂(?)ハいかめしき固ようて唯一揆
の堺のみならず諸国鳥合の門徒ぶこれを守らん籠るまゝに
かくまで手をつくせども今にこれを攻おとさん
全く門徒ちかく信心無二の能格(?)なる故ハなり紀中南紀
雑賀の門徒ちかく島濱(?)を潤沫し義軍とくみしうなら
いまだ此ハ所従雑賀を征伐し其根を断枯さんなりとて
石山ハ其まゝさしおかれとて竟ニ天正五年二月
十四日にわかに上洛し明日(?)ちかく出陣し雑賀征伐の志を
議しなされけれ雑賀の三成ならびに根来の杉坊ホ二心
しく信長が方にまゐるべきよし謀しあわせしかバ信長公

おほきによろこびすみやかに評議決し同二月十五日に京都より
河州若江に出張し大将にハ秋田城之助信忠北畠中将信雄
織田上総助神戸三七等すべて十五ケ国の精兵を引率して
まちむかハしむかひし程に雑賀が方にハかねて此期はけ
是まで悪運の尽るところなるべしと各心を一致になして苟も活
ざるおもひをなしつゝ更にすこしも和歌弥勒寺山に要害を守り
小雑賀の上下名舛濱も津にかれての辺の川中ニ桶壺の杭を
いつもれく埋て人馬の足をたすけんをまつへくあまくし今や
おそしと待かけしに先鋒ハ進し佐久間右衛門尉信盛羽柴
筑前守秀吉荒木摂津守別所小三郎同孫右衛門尉堀
久太郎なんど一騎当千の勇将ハ三成ならびに杉の坊を案内
として同三月三日押寄来るが雑賀がかたにハ待かけたるを
なれバ弥勒寺山と元より北の堅上の峰よりそとかまへ


弥勒寺山に
雛が谷合戦
東淨寺山
砦
甲崎砦

松田源三太夫が弟右衛門太夫宮本平太夫藤井太郎左衛門其の
勢五百人雜賀川へ紀の川の水をせき入れ柵逆茂木をひしと構
へかけを設け補毫まろの足をもなやまさんとハ中の手ハ原
見塚より宇須山東禅寺山の砦ハ鈴木孫市みづから
内太夫丘外雜賀の諸士を率て三郎の勇名の將士ととなく
これを守る和田甲崎の砦ハ関掃部太夫同四郎八郎弁
栃七渡辺左衛門が守り岸ハ大将と立すべ五百人
中手の味方ハちうを合せ南ハ中津所々名ぐくの
弘く上口刑部種ハ五郎左衛門和歌意三好松雲その
手勢あるのもかふ八百人弥勒寺山の本陣ハ的場源四郎
とまもり南ハよう東岳の勢ふ子からごとく島流を流れかけくひつ
すよれ先手へ押寄る堀久太郎へあもちうく敗走しすでに馬を
たさんとする所其日や千毎の大退瀬あるの本所や

汐堪へしざうくに手をかけし寄に滔く押寄るところ
狼べくさぬるをあしきよし水際をもろく河の中へさし
流め引つかさんぐ小舟を漕ぬるに遠ち手の下に百四五十騎
ほどきつく討倒しけのうち其将やとくとう大崖が
性よく門まてい雜賀が勢将をやりしとに勝凱を上
けろく吾ゆかの追取もことも遂にじ寄せしけれバさ
もてべうの大軍といへども大潰し四道路に落く引退く
所く織田方にハ終よ勝負なくし雜賀が勢の嶽ハせうぞう
一揆の断滅ありまでとうまするにぞ太刀も一戦ふ
勝利ハゆきてひ世運とひとく偏よ神仏の擁護を
あつくるよもつでひあさもの物がなひのくるどくく刀服
差を納くし千島流をうちぬるつく折りのとさしうきし
関戸村太守矢宮の廣末に於ぶりにはべよろしに渾て

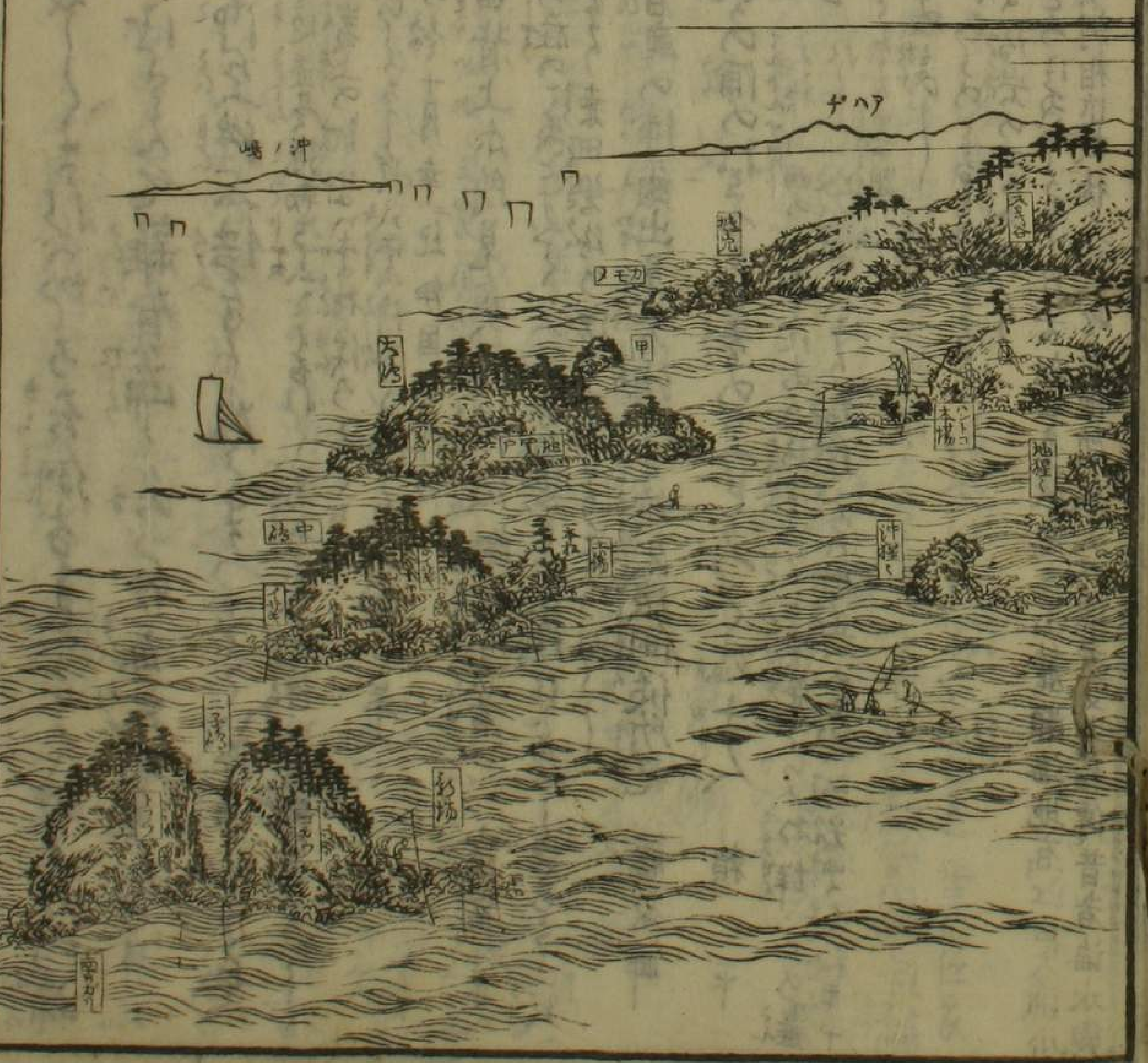
雜賀の浦
鶴の巣巖
儀釣岩
教如上人巖

題釣叟圖
未遇周王出還辭漢主歸終年釣不得生計初來非
縣周南

雪玉
川のくへ代きれ
うくもしき よる魚の
こころも人に
れちり 世の中
實隆

あらけける霞の
すそや ゆさ子山
若山
魚十

波の日や
鷗の羽に
ちからあり
勢州津
徐來



とあくつき見しくさればかゝる吉例あるにならひけらしたの踊
拍子に後にはさんて雑賀踊と名づけ毎年四月十七日
東照神君の御宝前に供奉したてまつることいなりしとぞ

硯石　和歌浦御宮の近辺弥勒寺といふ寺の後に岩石あり其体硯の如し
このゆへに名づく[illegible]

雑賀野
万葉　左日鹿野由背上尓所見奥嶋清波瀲尓風吹者
甲子冬十月幸紀伊国時作歌　神亀元年
雑賀の荘の[illegible]
山邊宿祢赤人

雑賀浦
万葉　木国之狭日鹿の浦爾出見者海人之燈火浪間従所見　藤原卿

梅渓翁旧宅址　天神山西の[illegible]
[illegible]衛正一の[illegible]
本国の儒臣とする墨跡[illegible]

夫木　紀の国やさひかの浦のなきさより春の日なかく海士人　頼平

ほ釣岩
世よ[illegible]のこし
[illegible]釣岩の二字あり

小江の浦
古記曰多故受志山麓瀬海地有江曰大浦小江
江倭訓相近故後人訛而無他所称小江浦者与文相傳昔者海水與

正治百　名草濱通入此所ニ中古壅閼為陸云
さひかたや江の浦へのをちこちにかけて秋の風ぞさむき　正三位経家

雑賀崎浦　此地漁戸数多し西南の方に鷲巣といふ所あり千仞の岩壁聳て下不測
[illegible]南の方に[illegible]
[illegible]として目渡の[illegible]水天相接[illegible]秋の
[illegible]半日の[illegible]

賦漁父　中洲
苔磯垂釣罷繋舟古湾頭慣聞流水韻欣笑不驚鷗

鷲巣巌　絶壁にそばだちて隼鷲巣をくふゆゑにかく名づく岩間の
[illegible]風の[illegible]屈曲あるも[illegible]
[illegible]
の御門主[illegible]上人既に[illegible]御退去ありし後[illegible]寺
[illegible]志の面々五六輩[illegible]新御[illegible]
すめまゐらせたるも[illegible]
[illegible]既に諸国の[illegible]

御門主ハ大におどろかれ思召御合躰ならざる疑を遁れがたく思召
いつはりて教如上人を御勘当の旨を立られ果して織田方から
大坂へ討人とさし向られ新御門主ハ大坂にも止りかねさせ給ひ
ハ御流浪ありけれハ天正八年八月二日泉州佐野川の
孫市なるもの倶し奉りて此所に忍ひ給ひしかども兎角
に織田方より昼夜となく兵士をもつかはして詮議せらるゝ故
ふかく御身も危くいかゞやと思召つひに刈しも雑賀の門徒
の内よりこゝろよせ参らせしものありて山中に志のだやまへ
忍ばしよし御門主をひそかにうつし参らせけるとなん
えだの葉を身をひそめなる鷺の巣にすむ子を思ふ心
よそめあてなさまけつとなん是ありしてかくれ家たずねけるや
鳥追て花はちりゆく巣立かな　美濃　恕風

矢宮

閑戸村にあり雑賀庄二十一ケ村の生土神にて御祭九月十三日流鏑馬数十騎あり

祀神一座　武用身命

矢宮

流鏑馬の記録流れうへや数松葉　若山　其友

駒なるもさしめぐる衆や神のみる氣色　若山　井指

末社 住吉 春日 両宮 稲荷 金毘羅 拝殿にあり 駒留の松 拝殿の前にありて枝葉地を這ふて盆景のごとく

又鼻涂の神れ

社傳に曰く此地へ雑樹繁茂せる深林なりしが或

其たゞ一の大なる異鳥を放ちなるが又里人たち怪を

ひらけにはつく是を探るに一隻の白羽の矢あり これにおいて

里人其神なることをしりてこゝに叢祠

をいとなみ崇祭しかば神すなはち巫に憑託していはく吾は

これ軍神なり永く吾を尊崇し祭らば吾まさに此所を

護りてさかへすべしと是よりもと宮とよびまつり侍る

按ずるに当社は矢田部の祖神とあがめまつるなるべし 姓氏録山城国神別矢

田部 鴨縣主同祖 鴨建津身之後也とあることに小すなはち当社にまつる所の

神なり又日本書紀鴨縣主の条に鴨縣主同祖神日本磐余彦天

皇 神武 後也 欲向中洲之時 山中嶮絶 跋渉失路 於是神魂命孫鴨

建津之身命 化如大鳥 翔飛奉導 遂達中洲 時天皇嘉其有功

特厚褒賞 八咫烏之号 従此始也とあり是鴨建津之身命大鳥と化

して皇師を導き給ひし功によりて此世よりて神號をなし軍の守護

神とするなるべし社傳の説と合へり戦神とあるぞたゞしき証なるべし

去る天正五年織田内府 信長 諸将をして雑賀を攻るに

あるとき村民たちよ敵をさけしとひそかに冥助をいのりしが

神巫託に示しこの森へ敵兵のよせ来るべし三月三日

退潮の時を期すべしといへり期するに及て潮を退き

退さしめんと宣しく法のごとくなすべしとありしが果して

託宣のごとく其日の勝利をえたりしかば村民の悩作

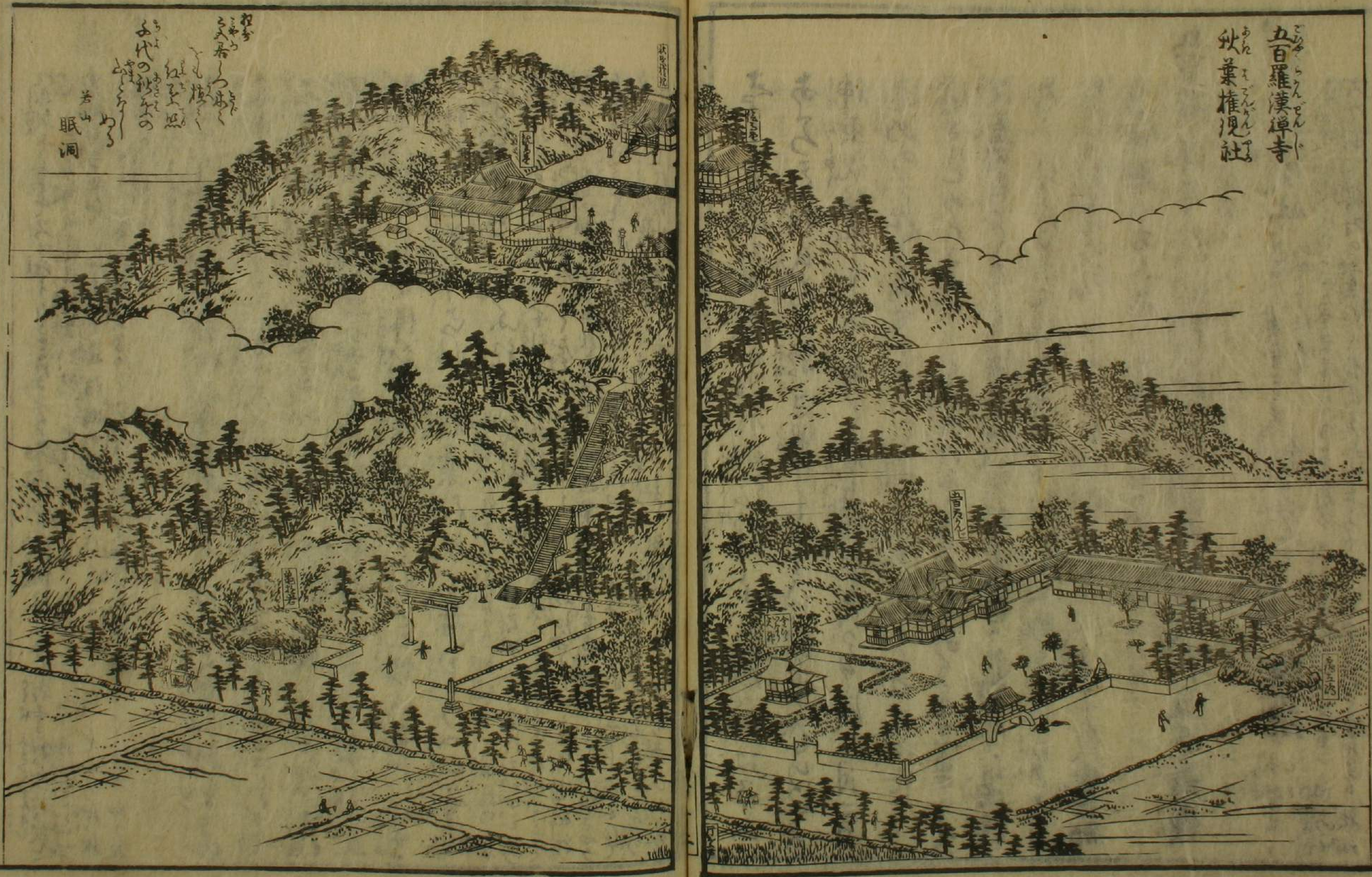
大きになりしが遂に雑賀二十一ヶ村の生土神とし崇なしまつり

かれは和光の影あきらかに日夜のちかひ淺からぬ冥助

の應驗あるなりとぞ

五百羅漢寺 同村にあり 中央に釈迦仏 左右に五百羅漢

秋葉大権現社 五百羅漢寺うしろ 観音堂 本堂の右 繪馬掛 本社の前にあり


五百羅漢禪寺
秋葉權現社
眠洞

れ志記ふくしてつかて時より霊にさうら…の行僧につゞく わが朝秋葉権現と
称しよく行ふるは遠州秋葉山へ出現して往火の災厄を除けりて立て…を主世
を持かる事もつひは行て火難除滅の霊験とはれまるかりくとぞその行に
しるしきやくつひをうにけん事ありて行者しけるに四方に蕃縁しくさとりふん
神通を剣に立し
信ぜられしまる

夫遠州周知郡犬居村に峯よぶ所あり大登山秋葉寺といふ
是由なる年ふるに元正天皇の御宇養老二年役の行者
太士諸国巡行のとき此峯にのぼり老樹を伐て聖観音
軍地蔵十一面大悲の三尊三躯を彫刻して天下安全五
穀豊饒のために仏刹を造建しておよそ行の開基は信濃
の行者大宝令による秋葉権現を相まつり一山寺院
行基えだと同時なり

ほとんどのち八十七日に八千坊八千…秋葉して鎮座の…
焼失してのち…十二坊の内に三坊に住職…
…鳥形…
…のちに…業生死の苦悪滅…
自然の…一つの白狐出現…
も止ん…衆生利益のつ…
きちひしれ彼山に白狐…幸ひ…

おさらの…像を見…
けるに…

当社の霊験まことに火難の中にも方
一に弓箭刀杖の横難をまぬがれ第二には火災焼亡の危
急をのがれ第三には洪水沈没の難をまぬかれ中古
甲斐国乱妨の軍勢が此秋葉の社頭を焼払んとしける所に
火をかけれども燃のうへより白水流れ出て猛火たちまち消て社殿
の樹皮少しも火に焦ざるところ見へたり火伏の神
徳広生の方便御因ある事に信敬せば よろしく
こゝによろしく…遠近をいはず
老若男女御千度践足まうで 道断寒垢離
しく社参…人昼夜絶ることなし

亀縦巌 秋葉山本社の傍にありて此巌にも…
鶴立嶌 五百羅漢の…

寒げなる鶴立島にあそぶのし　亮
阿波
順水

あしべのつる
わかの浦
若浦に塩満くれはかたをなみ
あしへをさして田鶴鳴わたる

芦辺寺旧跡　家宅立寺のかたはらにあり　法師谷　廣光寺のうしろの たにをいふ

小町が峯　府城の南居の上にあり。法師谷のうへをいふ。山ぐち小町でられいぶん 五百羅漢ちよう有

甲崎　蜆宮小一町ばかり

蜆の宮　のうく三所にあり　甲さんの川ぐちにあり　右社二軒あり

辨財天社　日本にあり。あらはとくに一ヶ所あり

宗祇の墓　宗祇瀬　紀川のかたはらにあり。宗祇法師右宗祇しきたり。百日の川のほとりにあり

しゐようこの所をもうく宗祇が流るいたへにもあり。きんご湯しよ入きするく猪子のあやまりなりとぞ

遊弱浦　野田好古尚甫

弱浦標勝境。壯觀天下奇。靈嶽孕寶符。神功極二儀。二儀高下擘遠眸。南呑三峯接十洲。激浪噴雪動地軸。嶽空雲帆蠻貊舟。指頭淡島青一朶。天柱想望幾千秋。玉島鍾秀駕鼇背。嵓户松徑彩雲浮。春樹長凝仙仗色。翠辇消息空悠悠。神祖宮殿摩蒼天。駕雲石磴排星躔。昇平久沐至治澤。本支百世日月懸。菅公祠廟欽威靈。蒼翠深籠古松烟。宵旰空傳夾龍補。一時文獻永赫然。金剛遥望望海樓。環洲夕漲擁岸遶。野樹津亭遠基布。鹵渺渺接鹽田。石橋穹窿臥長虹。崖續路轉開琳宮。松汀鶴唳沙鷗雨。葦岸人倚酒旗風。亀巖撹石相向背。恍望飛閣聳雲中。雲中奇觀無端倪。臨渉客輿或杈蹟。探冣剰得十洲趣。瓊樓瑶闕耐可採。秦皇求仙徒航海。穆王周遊風四蹄。若使海槎得相通。神眩空嗟當時瞬。勝境可賦趣可樂。胸中山水元領畧。山水争衡來奏奇。胸堂為之漫磊落。壯觀難極奇中奇。幾回欲賦筆相閣。

芦辺浦　わかの浦なる入江の千潟にて芦辺へしげりあへり。此所より磯づたひ玉津島へもゆくべし。しほみちくればかたをなみあしべをさしてたづなきわたる

新勅　わかのうら芦辺の田鶴のなくこゑに夜わたる月の影ぞさびしき　御製

玉葉　和歌の浦に年經て住し芦たづの雲井にのぼる今日のうれしさ　太宰大貳重家

續後　わかのうや代々のふるすの田鶴の子も雲井の形見ともなれ　法眼行澄

同　芦田鶴の世々のこゑをも位なれのぼるべき雲の上の風　法眼源兼

同　わかのうや雲井をさしてあしたづの聞えもなきは波のよるなり　藤原長遠

新千　年ふりて世々に住る芦田鶴の跡立まよふ和歌の浦なみ　花園院

同　けふよりの千とせの鶴の声ふりてなほ和歌の浦人　法印實甚

新拾　和歌の浦に年ふるたづの雲の上に立かへりける道を思はん　按察使實繼

新後　今よりは芦辺の鶴の声たてゝあまたの千代のうらかたみ　二條院讃岐

新續　若の浦の芦辺のたつの音をそへて立霞の帆　前参議行忠

同　雲のうへに聞えたる若の浦の芦辺のたづの音をも立そふ　須河法師

同
なにはの浦や雲ゐにかよふ誘ひきて芦のはそよぐ田鶴もなくなり　一品親王

家集
芦田鶴のなにはの浦にすだちけむよそにもこゝろ今ぞしられし　清輔朝臣

拾玉
なにはの風の芦のはにたつの声をきゝし汐やきてきく寝覚　慈鎮和尚

月清
芦のねのおしなべての田鶴の臣ちとせとうけて根にかへる　後京極摂政太政大臣

万葉
あしたのしもやつけても影をとゞむる波の上にかへるなにはの浦風　定家

壬二
なにはの浦に手をつらぬ芦のはのゆる上毛の霜をはらふる　家隆

家集
なにはなる芦のはにすむ芦辺よりちどりなくなり夕汐合ぞ　為家

瓊玉
芦間わけ夕なくれ家もすみなく夜の月かけてぞ芦の松原　宗尊親王

雪玉
なにはのうら今もなほ津風吹く芦辺のはるも芭蕉が宿　実隆

若のうらや汐満ちく田鶴もちとりあし　守武

澪標をしるしとしやあしの田鶴　槐亭

斤葉の芦

なにはつ津や村の小の入江にあり昔より芦辺の遺跡とす川辺のあしに浅る。つねに自然と斤葉となるのあり。又其性と変りて身にかはるより斤葉芦と名付く生ずるもあり。およそ此地もいにしへ入江にあらんは所々のなかにも其性なほありて残れ斤葉に生ずるも風土の所為なるべし。ほのかに物事のあしく目馴ちかう

名物芦辺団扇

同所にあり。難波にて多く製す。図扇に栖たる芦油ゐてよしあしの名をとゞめてあそびしなるべし。五雑俎に曰明朝の作なりと云々

浦々の名所にしてかくれなき者也。和訓義解に見ゆ。

うちはなるはちこひのまゝにぞ あるなり

雑賀城跡

当浦寺山の東にあり。いにしへ大坂の時、武家これを領して居住し其後代々の居たり。今は西の方のまゝ小六七町へ市店連なる

和歌入江

なにはづのうらの 此辺の名所なり

玉葉
人なみに我身はかゝりすむ和歌の浦の入江の水にみちぬれども　俊成女

新千
和歌の浦や入江の芦の霜をさむみ露ぞこぼるゝあしたの汀　家隆

新後
ひとりをはれなき歌のかや若浦の入江のみづにかれあつまし　源義将

文木
なにはのうらの入江にこゝにあるあさぢにあそびくらしける　光俊朝臣

艸庵
わがまゝにもなにはなる事のうらの松のしも入江のたへの名も舟　頓阿法師

妹背山養珠寺

は村にあり。法華宗京法流本光寺末なり。本尊は　二天　多聞天の作　大黒天の作　日蓮大士の作　本堂　一切経蔵　本尊釈迦如来 三宝 高祖大士の作なり。紀州徳川家代々の御菩提所なり。一切経蔵は南龍院殿御母君 養珠院殿の御建立なり。

持仏堂

養珠院殿の御持仏を安置す。養珠院殿は紀州中納言頼宣卿の御母堂にて、此山は其菩提所なり。

養珠寺　妙見堂

養珠寺賞

垂絲櫻花

夜來新雨足。枝放千分姸。鶯々比梨暖條々借柳懸。宇秫地勝繋客醉花。昔年但恐暴風夜。正逢寒食前。

祇南海

垂絲宜春花

宜春苑裏競妖嬈。移種遙隨南海潮。織女機紡天外。洛仙姬鍼線日邊。飄摘風白髮三千丈。帶雪垂楊十萬條。曽作東方春色主。年年獨立衆芳朝。

崧岳

百さしも春の遊ありいとさくら

大坂　野坡

雨の日もまたさくとしへし糸櫻

吳陵　五筑

書院　養珠院殿駿州にありて御座御殿にしつらひ給ひし御間なりとぞ虎の間より入
画は古狩野の筆にしてよしの山の桜を画かれし庭前に紅葉の[illegible]つゝじの頃などことに眺めあり

林泉　明和　前亜相頼宣卿の命にて作らせ給ひし所にて秋冬の頃も風景すぐれたり

思齊斎泉　このいつみの名は詩経曰思齊大任文王之母より出て南龍院殿の御命名にて本藩儒臣竹内某作記
山にそふて大恵院殿香巌院殿大恵院殿御墓の[illegible]僧侶日々読誦し[illegible]
又大恵院殿の御具[illegible]あけおきたり

なかにも又さんの手向水もありと今にいひつたへり

妙見堂　境内の後山の　中央妙見大菩薩　左三十番神　右東照神君　五番善神
この妙見堂は寛永三年御建立にしてまつる所の南龍院殿御等身の像を安置す南龍公の御手づから一刀三礼にて彫刻し給ひし尊像なり
紫衣寺元年日蓮上人江府の御中にありて[illegible]御身の[illegible]一部両軸の法華経を書写し給ひしを奉納ありて開眼供養
若州長源寺日演と召させられ開眼供養ありしとぞ

牛角石　園祖君当尼の御家にて甲州本栖にて[illegible]藩葉[illegible]牛に[illegible]北瀧泊一人[illegible]石玉是を[illegible]は[illegible]有所也

当山は慶応三年の御造営にして心性院日善上人の寄進なり

諸堂坊は駿州の御館　養珠院殿の御座御殿なり御在世のとき

これ仏刹御造立御心願ありしかども程なく御遠行ののち
此地に引移したまふ仏殿は古代の作物にして荘麗これ也

望海楼遺跡　古へ望海楼のいにしへはこの妙見堂の山西のかた千有余尺とかや海をのぞみ其ころの眺望を[illegible]玉津島の[illegible]又大相国の[illegible]の數
とも妙見の[illegible]年紀久しくはるか[illegible]玉津島神社の森下にくらしくつゞきて

登妙見山　　祇南海

望海層楼何処求。玉津島北石巌頭。翠華不返煙波闊。沙鳥雲帆神護秋。
称徳帝神護元年幸明光浦詣玉津嶋御望海楼奏歌舞雑伎

今按ニ妙見山乃チ是望海楼ノ遺址

芦辺茶店　芦辺の二亭あり

わかあし辺の茶やはなく
ちれしうちちるの花をまつ[illegible]
塚ゝやまゝとうり音こく
淡々
老貫

三断橋　これ杭州西湖の六橋のおもかげありて風景まことに壮観とぞいふべし

望海樓（ぼうかいろう）

聖武稱徳両帝御望海樓奏歌舞雜伎

郭公山　今妹背山といふ　いにしへの名ハしらく今も右近の法名これありてかくざんきこゆ元月のきこゆげ　あるハちかめて法文ありといへバ驚しく流碑のこれたかし
そのつたへハたゞこれらの
わすとさるれも文章やさしくあはれ

ほとゝぎすなくや五月の玉津島　無名氏

月ぞ知る夕ぐれはよるべなく暮れ　宗梃

杜宇なきつるのあしの傘ハ館　淡々

経王堂
三間四面にして左に法華経あり碑石後日最讃薩達磨芬陀利伽蘇多覧の梵語を鐫し山の
礼裏にも文字あれども磨減れバよめず日蓮の筆なりといふ人あやまりて此地を
経をつくして弁財天の中にあり　しよりつくりもつてしらべて後ところの所なり
つくしてもつて妹背山にあり本尊釈迦仏阿弥陀如来の三尊なるかなが法の祖伝代のうちに
妹背山にあり本尊釈迦仏阿弥陀如来の三尊なり本尊ハ弘法大師の作かとおもへば宝に骨とれまた次たまふ

多宝塔

唐門　端門　自然石階櫃　泮殿　塔頭　海禅院

南山御宝塔ハ寛永二年中正院日張僧都の開基にして則
東照神君　三十三回の御追福として鉄許の小石に法華の首
題を書写したまふ　本院ハ上皇の叡聞に達しそれよ
信心深き叡感のあまり　御宸翰の題目を添させたまひし

公卿百官の御書題目石を納めさせたまへり　諸国より集め
の題目石都て二十八万をすなはち宝塔の下におさめ置くなる是を
収めて本院の儒官木下順庵長田道恭南山三世通玄
院日演上人おのおの記くし妹背山の記を作りてかまへ
此地をもつてしらべて其景色たる欽明相州江のしま江洲竹生
島などにもくらべて紀州和歌の浦の江中にある中にも壮観
なる所なり弁財天の名もあるが中に御宝塔仏舎利建のとれ
竹本丹後守の御像にして其右の奇石をねらひ人々歩を集
てこれを尊ども覚えたる文字は貝形の石なりし古人此数石をとして
まなびて石をもつてさるまでに数石をつぎれ来りしもろもろ安くと
ひとつひとつ霊人かの夫の如くにのぞみて人ひとつにしてつゞく縁
雄石に御法号を刻して宝塔の安置し雌石に妙法蓮
華経の題目をきざみて山の下に建つるの雄雌の石よりて

観海閣
水閣涼風
殊巌景比
他殊閣上
遊人無日無
尤是清涼不
知夏天風吹
月過平湖
祇南海
狂歌
鯛屋貞柳

妹背山とハあらたなるよび名にて此宮ハ補陀洛山にちかくびく石燈
相同じ注ぎ入水の和哥出で來るもの〻なく山わらから一面
の入海にてあらしふきや石面浪さまにして伽羅の本渾に
似たれバとくかくハいふなり　國祖君御造営あり
三ッの橋をわたりて山のあひにハ石をたゝみあげし山上にハ
宝塔ありて従ひて石階をのぼりて水楼ありとなりのいふ名ふあり
和哥のうら東面ハ名草山あり山ふ絶妙を語ふ絶たり
かゝる所ニあられ御勢施ありも下民の仕観をゆるさるゝ四季
をりくの同郎あそ宮れはとしあゆまうものがさなくての
しゝ奥にて武人ハ是ぞ文王の園のひをまうし宣なりしや編者
揺るふ其若玉出しまの名ハありしも宮れ起るものふんらし
桂稿そゑて寿ありハ妹背ふありてものゝ星霜をへりて
あれ雅名を失へさるハ不久みをれもあれたるゝれ神号も

おゝかたハあらうまでゆくゆかりなくこれハなさくろふ混雑
して是非を辨ざることのみ多し遺憾なるのみなるべし

丁未中秋與諸子泛明光浦　祇南海

明月何月不三五。天時何歳秋不中。唯此良宵清影多。今年
幸又無颶風。煙消雲盡江天晩。斜陽西没金霞紅。凜然明鏡
髪可鑑。露濯桂香沙蟾宮。此時良約不愆期。此夕良會四美
同。地上何處無好山。天下何處無好水。不如江南山水美。山
秀水明縁雲裏。琴浦洲前白練潤。玉津宮外金波起。雙々宿
鷺依苔磯。行々新雁落蘭沚。城中何人不上樓。城外何人不
登舟。不知誰家能望月。不知何人能解遊。賦成空想西園蓋。
繁絃急管徒嘲啁。豈如文場人如玉。倚欄水閣看白鷗。半夜
長風天上來。吟髪颯々不可留。月華高昇金剛峯。直命蘭橈
放中流。與遂星槎凌霄漢。身生羽翼度瀛洲。浩歌酣飲出塵

埃岸上人言李郭傳卿杯向天仰大笑明月落杯河影浮使君特贈紫錦鱗兼之玉醪紅新篘高僧亦頌香積厨石花雲旁秋萩柔佳期如此人不醉嫦娥笑人空白頭不惜十千盡一復賒為君掃盡萬古愁君不見治兼丞相気如虎遷都自謂開天府南渡衣冠郷夢冷携月淡島及明浦借問人與月孰有無唯聽蘆荻風今古人生歡樂奈老何帳望斜月沉江波嗟我安得虹蜺長萬丈躡作天梯挽回玉轡於金樞之何

此夕久野君馳使賜鯉魚及美醴養珠寺隆上人聞船過門前贈行厨

妹背海苔（いもせのり）

又和歌浦海苔ともいふ此辺の磯にあり此海苔は[illegible]

巌乃祠（いはやのほこら）

玉津しま及神社南方の海中にあり[illegible]乃巌とも牛の巌ともいふ

これ上古玉津嶋の神祭礼に神幸ありし御旅所の旧跡なり永禄年中まてハ祭日此巌へ神輿渡幸ありけるに風波急にして神輿[illegible]漂没しけるより其のち神幸を止めたまふ[illegible]むかし玉津嶋明神の神輿此ところへ渡御ありたる[illegible]玉津嶋明神[illegible]姫を慕ひたまひ御馬にのりて通ひたまひしを丹生明神[illegible]彼玉津嶋へ神幸[illegible]丹生明神の御[illegible]高野大明神の行状記にのせたり

[illegible]大納言公任卿家集[illegible]

[illegible]

海士人のけふ漁しらんきをしはやからずふ奥と哀やしまん　公任

あまのをむ浪のからやの紅の浪の花をわれてよもしらん　少将

よろしくは

彼きしれきもんと寺りて岩けに沖つ紀と君にいはのる　公任

和歌のうらにうちよせてかへるみかさ
さらすてう老なるあまのかりえて

年ふへて和歌の浦なる藻にありし老の浪にや寄て濡るる　少将

連洗岩　らしのかやのまへあり　江中にあり

獨螯蟹　その蟹なかまく小蟹にして色白く斤の至るところ泡のなとより実ふくに入るをかにて草綱目に曰獨螯蟹有毒不可食之と云

船遊和歌浦奉次家大人韻　南嶋樵者

檜嶺蒼茫古佛壇。入風梵貝度雲端。雨晴海嶽殊明媚。天接烟波獨渺漫。鱸戸花開春晝静。漁村松痩夕陽寒。欲尋當日行宮處。鼓石驕濤響玉鑾

玉津嶋神社　日本の　此神は明光浦之霊にて衣通姫を配しまつる

四條大納言公任卿和歌浦遊覧

祀神の事説區〻なり皆く衍よ疑ハしくかんがへ出せり 浄殿 三十六歌仙圖狩野與甫うつされ
なれしなるべき論するところなしまつれり 上覧よりあとより代〻の御法楽

神楽舎 神輿ハ明和中近衛關白殿下の御寄附

寶庫 禁裏御所御代〻の御法楽 御歌御奉納

石燈籠 正徳四年 霊元上皇御奉納 銘曰 神前常夜燈御願成就書ス 享保甲寅 穀直の銘

兼應四年 國君より御奉納 銘曰

同 双巻 於戯霊瑞于今千昔。貞堅影堂。永世同蹤。

神亀元年甲子冬十月五日幸紀伊国時山部宿祢赤人作歌一首 并短歌

万葉

安見知之和期大王之常宮等仕奉流左日鹿野由背上尓所見奥嶋清波瀲尓風吹者白浪左和伎潮干者玉藻苅管神代従然尊吉玉津島夜麻

反歌

同 奥嶋荒礒之玉藻潮干満伊隠去者所念武香聞

同 玉津嶋見而伊座青丹吉平城有人之待問者如何　作者不知

同 玉津嶋雖見不飽何為而裹持将去不見人之為

同 玉津嶋見之善雲吾無京往而恋幕思者

同 玉津嶋礒之裏末之真名仁文爾保比去名妹觸險　人麻呂

古今 わたの原よせくる浪のしばしばもみまくのほしき玉津島かも　よみ人しらず

後撰 玉津しま深き入江をこぐ船のうきたる恋もわれハするかな　くろぬし

金葉 玉川の岸うつ波の立かへりせでこそまた我名ハさらしも　修理大夫顕季

續後 人とはゞかへらん玉津しますむ入江の春のあけぼの　参議為氏

續古 いくかへり和哥の浦風身にしめて玉津嶋姫　摂政前太政大臣

同 かぞへてよ和哥の浦路ふかく君をや侍し玉津嶋姫　菅原隆信

續古 このたびはあとよも玉津しまみがく言葉の神いたゞくし　前内大臣基

玉葉 三代までにふりぬる今の名もうれしきをとこしへに玉津嶋姫　後嵯峨院御製

同 すゑてたにうれもあらは玉津しまもへ神のこゝろをしれ
玉川しまにまもりてよみ給ふる　崇徳院御製

續千 きよれゆく波に玉津しま今もあかしもまた　前大納言為家

同 和哥の浦にまもるひかりの玉津嶋なほ過し世の影ぞすむなる　惟宗忠景

風雅 玉しまやしらぬもあすのつまくさもつみてんみな人の為　よみ人しらず

新千 玉津嶋ふけゆく月の影すみてよせくる浪の秋のしらゆふ　源親長朝臣

前大納言為世玉津しまの社にて歌合し侍りけるに

新拾 なかしらん光をそふる玉津しまよろつよまても神やうくらん　津守国道

新後 老の浪たちかへりてもあはれとやみよや玉川しま姫　信実朝臣

旧 玉津しまたえぬる人の言の葉の露もみかくやそへん　大僧正覚済

新續 すめらきの三代の流をうけて玉津しまひある神の恵とそしる　権大僧都尭孝

旧 我もまた三代まて別きてみかく玉津しま姫　鹿園院入道前太政大臣

旧 今そしる御代をまもりてわかのうらちまて玉津しまひめ　後光明照院関白前左大臣

夫木 ありあけの月のかけひかて清くかよふ玉津しまやま　季能

旧 玉津しまみきはの湊よりふかきまつと月やさえそらん　後九条内大臣

旧 玉つしま礒辺の松の木間よりおほろにすめる春の夜の月　太宰帥為教

旧 なにはえの方にはなれぬ玉津しまみえつるかたの江の月　慈鎮和尚

旧 思ひいてもなき身なれとも君にしもおもひける玉津しまひめ　法印高家

旧 玉津しま波のうへにもひかりけてこそよせよ和哥の浦風　権大納言忠良

旧 玉川の和哥の松原ゆくすゑはしらまきの月のちとせまつらん　鎌倉右大臣

教本 いにしへのことの葉しけき玉川の波をもよほす和哥の浦哉　俊頼

旧 今こそ玉つしま姫をなかきあまねく和哥の浦にそ　永縁

月清 たまつしま絶ぬ流のそての神ならはしみよろしからしき　後京極摂政太政大臣

玉吟 玉津嶋さらに千鳥の鳴声のあはれとしたふその夜の月　家隆

千五 この比は和哥の浦波立まさりなかき世ちかく玉川のしま姫　家長

新六 いかにせん玉川のしまひめのわかき世の浪のたちまちもかな　行家

名所歌合 吹まよふ和哥の浦わの色まさりよせよ玉津しまの守り神まもらく　忠定

なかつてもまもるや玉津しま千鳥のなくなる有明のつき　俊成卿

南都 やはらくる光にもよる和哥の浦にてのみやく玉津しま姫　左近中将長親

艸菴 人毎に道をそてらす玉つしまもとの光をみやきらん　頓阿法師

西楼 住吉や玉津島松も色植く道ふともちて宿れひさしん 栄雅

千首 若の浦にあふよする玉津島なみふかんとそくさらめやれ 宋雅

耳露 浪さえも光ふる玉津島のうらなるくてれ月影 前右大臣 源朝臣

柏玉 あつめ置くかまくの道の百線の仔もとちれ玉津島姫 後柏原院御製

雪玉 あらけるまたあらけるこのいけ道のたゆへしぬひあ 實隆

千首 なくひかたよかかかそうさくかれのつくふつ道玉つしまひあ 牡丹花

同 としみ艸枕のはるかもし玉つ島影もとめてはひかりこそへき 耕雲

同 すかまても此道さかれ玉津島姫の誓も世くに在れ 春宮大夫師兼

哥合 世とへのうやとうれ玉津島さみくあくるのうの吉くしふ 天台座主ゐ慈

良玉 にぐるれ玉やゐ江の小松てあらんよ世のうけそへけれ よみ人しらず

永久 玉津島入江の小松ねひれたらうなみ御素代とやはほに 相模

家集 とろひのこれ玉津島ねふこ秋への浦しけの秋ぞまさ月とぞん 為氏卿 雅有

千首 神もさてんかとぞうる玉津島入江の月のあけのぞそう 権大納言為家

艸根 朝あく霞む入江の玉津島すさくや春のまそうらん 正徹

六帖 玉津島入江の小松人ならし先世のうちし寄しかな 無名

當社御法座の本縁旧記のはえく仮をつたものもく社頭の額

後花式の断絶とし既に尚しこれ萬治年間

國祖君前亜相公旧址の荒廃を歎りたまひあうたもに寄る殿

あまとおもし新殿れよ神座をさらへに建立ありたまひされ

参尊乃儀式と直乃御なりしもちんが為尋て寛文四年

聖護院宮二品法親王にあれく其旨 後西院 院御所

れ奏しなされしうへ 上皇叡感ましまして即く神祇官

ト部氏に命く参拝乃礼式を撰ばびて国史に載る所乃

玉津島神の本紀祭を抄出しめしれありさし帰入うて

且よう以来例歳三月九月二の卯日 禁裏御所より勅使

をたつえひ神獻たまくにしく遊神のことを執行せしあへ

されバ春秋二時乃御祭礼ハいとゆゝしく始まりそのゝち
上皇古今集御傳受のことありしよりぞ御法楽のため
御製の和哥三首并びに公卿乃詠哥四十七首都合五十首の
和哥御奉納ありしたまひつゝ今に絶ず久しく神前乃
宮居ある荘厳のいろとまし神威赫々として四方にかゞ
やくに実も玉出嶋の名に負へる神の奇霊なるによりて雖偏小
國但君御丹誠の力ちかひハ是ぞ神人合璧しく其蹟となれる玉へ
とやいふべし

○玉津嶋と云る称呼古今変革ある事 附り化神のこと并ひ和哥の神とする訳

世俗に玉津嶋の神を衣通姫なりといひて和哥の神とする
ハ其謂なきにあらず甚だ袖中抄顕昭云故左京亮被申さ
ハ住吉神主國基云住吉乃本三社なり第四社は玉津嶋明神即
衣通姫なり後にうつりたまへる後に好和哥玉ふ云々又清輔仲朗はぞ

津守國基玉出嶋霊夢の所

年ふれど老もせずして和哥の浦に幾世になりぬ玉津嶋姫　津守国基

是は住吉神宮寺の東なる浄土寺ある国基此堂を建立のとき壇の石をもとむとて紀伊国に渡りて和哥浦の玉津嶋の神社にまうでけるに衣通姫のおはしますところと面白がりたるに神を拝して跡を垂れたまふとかの御かたに見へしなり此歌は讀てたてまつる其夜の夢に唐装束にて裳唐衣着たる女十人ばかり出来てしらし慶びの心ありとく?べき石なりと教へ給ふ夢のごとく石あり是を持かへりて一度に十二顆に破りて壇の餝りにしけり其後又小嶋准后親房卿古今集序注に或抄を引て云五十八代の御門光孝天皇御脳ありし時帝の御夢に赤衣を着たる女房ありて枕に立て

立かへり又も此世に跡たれん其名うれしき和哥の浦波

と吟じ給ふは帝御夢の中に誰人にてましますと問給へば

たゞ今は衣通姫なりと答てうせ給ふよりて仁和二年九月十三日右大弁源隆行を勅使として紀伊国和哥浦につかはし衣通姫を玉津嶋の神と祝ひまつりて以上三説とも衣通姫を玉津嶋の神とするなれど国史にもみえずいとおぼつかなき事なりされど此地に衣通姫の跡をもとむる由縁もあるにやすべて世の人の説はさまざまなれど上の件の人々の書にもあるはしるし信じがたきよしを至て後の世に下りて知ふとくに考ふる人なく唯説を伝ふるのみなるべし（寛平年の通記に寛元年十月勅使衣通姫を紀伊国に神祇大副ト部兼直白王后と明神とまつりすぐれしへの正史をと）しくは其わけの説あるにや出ては何の神ともさだかならず又は先此地と玉津嶋とはいへるべし其地にまつれる神は是をふみわけて上古は玉出嶋ともいひて津守などと獨立に此世のまさに出の字は差ひたり

日本後紀桓武天皇延暦二十三年冬十月壬子幸紀伊国玉出嶋
又三代實録元慶五年冬十二月廿二日丁酉紀伊国正六位上玉出嶋
神授従五位下　又扶桑畧記延喜十八年二月七日授玉出嶋明神従
五位上云々
又宇津保物語吹上巻上に

年をへて浪のよるてふ玉のをれめとやちぎりなをかけるらん　あるじの君
おちつもる玉よる浪のあらはれぬなをたづぬらしいそぎつゝほど　侍従
玉つしま浪よりあらはるゝ海のおもてよりこそ見ゆる　らうそけ

これらも其證なり但玉出の延喜式に玉出る嶋とある事も常に絶て
なかりしまうけふたりなりけむこころなれ語のおもむき考ふべし
神功皇后新羅を征したまふる時干珠満珠の二顆のむかし得
たまひし此浦の沖にして其珠をそそぐとよりくうち
名をよばしたるべし其凱陣しきつれたまふく桜珠の図

務古水門より當国日高にもどりたまへるとき彼霊珠をかへさ
まくる地なるよしにやあらん此浦に御船をよせさせたまひけんを
崩御の後に祭奉るといへるもかゝる由縁あるべしかし
干満二珠のことは昇天の後するよし安曇連にしるし取るとうつたへもあれど皇后の御手を擬げるに海水濾國大連ならびに國為海平ならしむる請あるさへに珠をも将来彼二珠によりて名に負ふしるしもかゝるにやかけまくもかしこき御代の皇后の御事をさぐりてもかゝる文武にわたらせ給ひしは彼
干満乃二珠をおさめ給へる摂津國住吉にしく彼所の玉出の玉也
きしもありけり

新拾　君か為玉出の岸による浪の數も千代もかきりあらし　津守國平

此千事書に住吉のやしろ歌合社頭祝といふ其社のうた合
あるひとの名の地の名所をほめたる事よくあるを作者その人
あまたあつめしたりてあるのはしなの二乃珠を泉州飯乙
の池に納られし由伝へたり如意明神といひて此説
一真をいへれども住吉にまつるところの神を按ずれ

一社 底筒男命 二社 中筒男命 三社 表筒男命 四社 神功皇后 又一説 一社 天照太神 二社 宇佐姫 三社 表筒男 中筒男 底筒男 四社 神功皇后 又一説 一社 天照太神 二社 田蓑姫 三社 表筒男 中筒男 底筒男 四社 神功皇后 又一説 一社 伊勢太神宮 二社 海神 三社 住吉 四社 玉津嶋 日本紀私記云 神名帳曰 摂津國住吉郡住吉座神四座 並名神大月次相嘗新嘗 先師説曰 称四座者 神功皇后坐別殿故 契中ヶ河社にも此説をのせらり是古の説として
雅へ考ふるに住吉四社の内一社はかならず神功皇后にてましませ
ど疑ひあるまでその神功皇后一説に玉津嶋としては文字も
玉津嶋明神としていへれ　名に負ふすなはち國學者の黙代住吉の社務なるも
名所となへるぞ例の説によりて玉津嶋あるは衣通姫とぞ社傳の中とあるに与玉津嶋明神と
深く考ふるもなく社務とも伝へられするたるべし　されば住吉に祭まる神功
皇后へましく玉津嶋にまつる御神なる人其餘の三社を
皇后御在世に祭らせたまへ由緒あるをもて皇后崩御の後
玉津嶋の御神とも併せて四社となしまつるなるべし是すなはち
玉津嶋の御神にて神功皇后にましまして書す珠さら

住吉の津守二所にあり古来十三日を神事の日とし卯の日と
もし衆人参詣することもえらび同じ神にまします由にかけて
ごやこれなどを思ふて住吉に玉出の玉出の岸あるは彼皇后
を祭るより起く当社の名を分つとれも呼ありし廻なる
べし或ひは千蔵の二洲は紀伊国日前宮にあるもいふそうこ奉
則古くはさへ川にしてなさもあるべし一日お宮いちじやる艸の濱乃
南濱の邊に在して当社を其所の摂社とすれば彼もへかと
当社へ納めし本社の日前宮とせしならんかしめる所さ
まじるも其関係ある所なき際ありちまさふあれど
これ汝如意の神と祭すなりしとあるは皇后長門国豊浦にて如意
如意珠のとく混じおやまりたるまでをとはたゞしなり 彼泉州揃館に の地にありちかく
当社弱浦はまつりける御神なるべしとも弱の御神とは
称へるん 住吉のもと摂津国にあるところの地名あるを長門国豊浦に
地の名なるも神の名なく 国は何郡外浜州との住吉の神とくあるはそしめすなるまでの
その神なりすとよしといへるたぐひなり 然るは皇國語に弱と

和哥は同じからん神とは和哥の神地とは和哥浦もよし
より住吉も同神なりと同じく和哥の神とはいひけむ其
を後の人考へずして衣通姫のうへにて河内国いまの和泉
茅渟の海と地接する海浜なれば是に跡をのこしたれ
よし附會するにあらぬ歟或は稚日女尊をおなじくと
云るは弱浦といへるに附會せるなれば昆表とらんにて足らざる
説なり猶よく論ずべきにあらねば續日本紀を按ずるに聖武
帝神亀元年十月幸紀伊國玉海部郡玉津嶋頓宮
留十有餘日云々詔曰登山望海此間最好不労遠行足
以遊覧故改弱濱名為明光浦宜置守戸勿令荒穢
春秋二時差遣官人奠祭玉津嶋之神明光之霊とあ
ありければ玉津嶋の神と云るは和哥の神といふべきを
△記されども上件の説よりして既に皇后をまつる玉津

名神とあがめられつべくもあらめ。もとより元亀のころまで
世々に霊ありける此處に白き高楼を建てく。地を
あらためて此浦の風色殊に明朗にして厳島にもおとらぬ
ところなれば、殊に美名を附して明光浦となづく
わかのうらへいふもみな用ひらるゝを吾妻と[illegible]
うべし明の[illegible]のかれかくその加はりつく阿か[illegible]明朗の[illegible]
すく[illegible]を用ひ
らるゝなるべし
ながめさせ給ひ、なほ此地のさまを合せまいらせて
まつるかしこき今春秋二度のまつりも此例によりて
まつらせ給ふ神とて此所に玉出嶋の神、神功皇后と御正
殊に此地の霊を合せまつりて正しく祭りよう
此御神の霊偉なることを志してつくし崇め奉らん神
徳の不思議なるはれの道をも後しよみがへらん奇験の掲
焉なるはその詣なる納受してゐるかざりん社中像数ゐ
神代の遺風歌園の道あらはれむ事後しるしてその

疑ひなくこれなりけんこゝに仏法によりする紫綺を作りなさるべき事に
ありて文東漸州の書に玉津島の社つゞきもなし。唯漫く
なる海のうへに古書にて本社をりつてまた玉津島の旧跡
の遠くしるまし。おのおのをと續拾遺の先氏は洛中より
御社を作らせく玉津島の社壇とさだめしなどいふ
參詣ある制札所に社壇をたて其後あるは浪風立て
ア後の中沙中に埋れるとく丈よりのちはなかく古きも
ぞうなるとて前に出でたる津守国基が浄土寺建立の
石とらは来りしを今いへど其頃まではなく社は
もあらしがつく荒廃して氏のもれぬかくしは生る也
に属けるに断絶し近世[illegible]国[illegible]君の再興まで其れたるを社
頭もあらずしておく堂をこの所として神人和合の
機をなるものといふべし
此に近考には[illegible]の府岩橋[illegible]家[illegible]
[illegible]按ずるに[illegible]の後に[illegible]へて記[illegible]

玉出嶋

かの家隆卿の詠給へる所は 〇屋の大人もこれをもちて玉くしげ見ゆれも拳らかなり
新続古今集十五秋の部に 寛喜三年の秋 大納言為家の家に 玉津島の社に詣でて
大臣の家の歌合に 大納言の 神の風と詠む人さへなり
のかしこき九月二十日 ばかりに詣で給ふ
まうで給へる時の歌なり

和歌の浦に道の跡をも神もまもりけるかな　大納言為世

元亨二年四月十九日勅撰の集を奉りける時 続千載といふ
慶運法師の和歌浦にて

七かへりの松風をとこの和歌の浦に君を八千代と祈るなりけん

[illegible]

わかの浦なる和歌の浦をまもらん玉津島姫

汐まくら鴨の声ものふ白し千世を　素園

松原へおちつむ声やこの川

名月やいなふくうけて浪のを　柳風

玉津島祠　林羅山 道春

百世神蹤何處尋。明光浦畔古宮深。玄時前報蜘蛛喜。網住允泰天子心。

同 玉津嶋　江邨綬 北海

江山一望画図中。勝地相連趣不同。白石参差雲海寺。青松掩映玉津宮。鶴飛蘆渚潮初至。亀曝岩路自通。況有扁舟堪載酒。探奇何用恨西東。

家集

玉津島岩根のすゑにおなじくまよひけりける和歌の浦波　源兼昌

岩根のとききれ 較社のあめ

玉津島岩根の末に波に尾ならもまよひけりわかの浦波　一條内府公

狂歌

和歌の浦にまつの満干の玉津島姫　洛 芳水

ひとつまみ古今の声のおもしろき　旧 季吟

神のまもりなる月　其角

残月やつきせぬ和哥のうらなみしるし　浪花　淡々

霧雨に衣通姫の素顔かな　長門　素道

玉津嶋明神は衣通姫を祭る。俳諧の和歌にいひかくるのみにあらず、風雅の人なれば、かくも思ひなすべし

藻屑にもいのちかひあり玉津嶋　佐倉　提亭

玉出嶋

見るかひのありくしくも海松の葉下に出しより　このしまれよりのちぞ

続古　和哥の浦に波よせかくる藻塩草集てぞ玉もかけける　太上天皇

続拾　ひろくぞ玉の光をそへて御代までわかの浦浪　後花山院入道前太政大臣

玉葉　和哥の浦やよせくる中のまろぶしも涙やまさる玉のひかりをそふる　入道前太政大臣

同　わけ入れば深むしろよりそれん玉の光をそふるよしもがな　従二位為子

続千　持明院殿にて人々題をさぐりて歌よませられしに、浦玉を
ありあけもひかりやそへん和哥の浦やしほの玉の数ぞまされる　前参議為相

同　芦のうらや埋れし玉も今ひかりそへて流れてあるらし　前関白太政大臣家讃岐

同　和哥のうらに文字ひろひて玉ならぬ光をそふる数ぞすくなき　惟宗忠景

同　和哥の浦にみがける玉を拾ひおきて古今の数をしるかな　為氏

風雅　芦の浦に心をよせて年ふれば藻屑を搔る玉ぞひろひし　大江宗時

同　昔今ひろへる玉も数々に光をそふる和哥のうらなみ　洞院前太政大臣

新千　玉よする藻屑なりとも芦の浦にたちまじりてぞ集に入る　遊義門院

同　玉よする浪のよるべは御代なれば風もたゞしき芦の浦松　徽安門院一条

同　なほもまた拾ひそへてぞ古の名をのこしける和哥の浦浪　等持院贈左大臣

同　和哥の浦の波よするたに数々に拾ふ玉の光をぞまつ　為定

同　和哥の浦や海人のたく火の光ある玉藻ひろふ波のよるさへ　後伏見院御製

新拾　芦浦にこころさびしき玉みちて世をあさくしける世の浦浪かな　法印定照

同　和哥の浦に玉ひろふ人まちもみよ道ともしらず拾ひもやせん　後西園寺入道前太政大臣

同　みがかるる玉を聞ても芦浦のなみのよるこそおもひしれ　よみ人しらず

新続　君ぞしるよする玉藻もみがきし世の千代もたえせぬ和哥の浦風　家隆

同　拾ひおく和哥の浦にもせぬ拾へる玉は千代のかずかも　前大納言為家

拾玉
藻塩草かくともつきじ和歌の浦に残れる玉も拾ひ尽くしつ　尊純親王

続千
荒磯の浪にやつるる玉藻をもなほ寄せかへす和歌の浦浪　家衡

家集
和歌の浦に拾ひ集むる玉藻にも世のためしをや先拾ふらん　為家

続後
いにしへの百の翁のあともなほ和歌の外にもあらはれなん　雅有

続拾
代々をへて拾ひし玉も見えずなる和歌の浦わに袖ぞ濡れける　雅俊

新葉
和歌の浦の玉藻かけたる人麿のあとにや立てる浪の白玉　右兵衛督盛匡

同
あはれとや代々の跡とて和歌の浦にみがける玉を拾ふ人世も　後村上院御製

此哥は元弘の頃家集を御撰あそばしける時の御製なり

名寄
あつめおく玉を返して此の浦の名にしおはぬはあらじとぞ思ふ

同
明けがたの人もまつらむ和歌の浦の月をよそにて帰る舟人　頓阿法師

西行
和歌の浦の名にしおひたる玉藻かな拾ひとどむる人のためにも　内大臣

同
和歌の浦に寄せくる浪のしきしきに拾ふ玉藻の数ぞ知られぬ　栄雅

家集
君が代に拾ふ渚の玉藻こそ千代を重ねん和歌の浦波　栄雅

文明
今よりは清き渚に残る玉拾ひて伝へ和歌の浦人　伊賀守坚盛

雲玉
拾ひ置く玉やわが身の浦人の心にかけて伝へ置くらん　実隆

同
よしあしと言はぬ和歌の浦やとも拾ふも玉の光ならめと　栄世

玉葉
和歌の浦に拾ひ置きても今はまた袖の浦見ん玉を見ぬかな　正徹

歌合
さらにまた和歌の浦わに拾ひおく玉を拾ふ世に立ちかへらなん　慈照院義政

眺山

[illegible]

妹背牡蠣
名産にして他境の品物より大いにして味美なりとぞ

和歌山大相院　律宗にて天台宗
本尊釈迦仏　脇士
恵心僧都の作

石動堂
本尊不動明王
弘法大師の作

林泉風景幽雅にして後山は望海楼の遺跡ありといふ南に
むかひあるは屏風を立るがごとく千丈の峰万丈の青巌に並
びたる岩は菅に藤鉄藤など奇樹怪石のさまいふもさらなり
松など生茂り絶頂よりの落る手のごとく木の根岩をつたふ眺
望さらに月のあかるは見て足をとどめて流汗を生ず

和歌松原　和歌ねて今も玉津しまの辺まで松林にしておりしとて其比へ東照宮名居き人々古松あり

徳大寺
雪積る和歌の松原ふりにけり幾世へぬらん玉津島守　従一位右大臣

又
夕されの春の塩干は静にて霞に並ぶ和歌の松原　中務つかさ

又
風吹けば寄する浪も和歌の松原　よみ人しられ

西櫻
まさご地も猶まさるらん白雪と流るゝ和歌の松原　栄雅

柏玉
塩干潟袖の上まで渡るゝ雪も積るひの松原　後柏原院

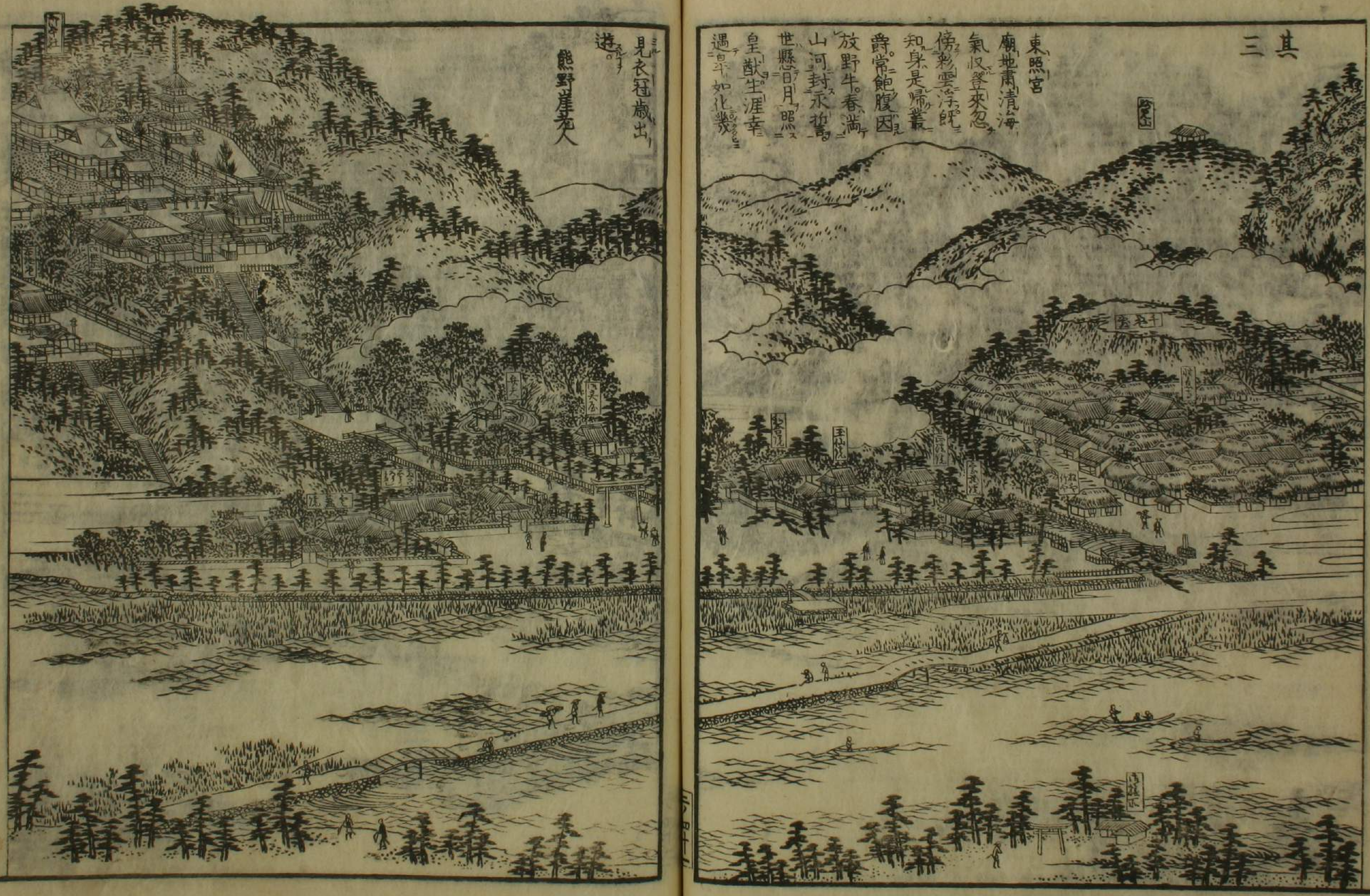
雪玉
けふは和歌の松原わたる塩干の雪に向ふ　実隆

妹背山
多寶塔
観海樓
三断橋
芦邉茶屋
三親
江上逍遙
佳客船子
規啼盡暮
春天聲聲
一夜催雙
涙回首郷
雲落月邉
大江資衡

明光蘆花
弱浦一名
明光浦古
人有蘆鶴
咏今有蘆
亭
開倚西風散
倚波蕭寒却
比翠花多曉
飛宕雁月侵
夢夜釣漁舟
雲満裳
祇南海

玉島澄暉
上有宮娥廟岩下
澄江秋月太清
風鳴江上幾夜漫々。
神女不還秋月圓
二十五絃空雁影
霜華如夢水雲寒。
祇南海

其二



其三
東照宮
廟地粛清海
氣收登來忽
傍彩雲浮既
知身是帰叢
爵常飽腹因
放野牛春満
山河封永誓
世懸日月照
皇猷生涯幸
遇昇平如此幾
見衣冠歳出
遊
熊野崖老人

其四　天満宮

和歌浦

秋日遊明光浦

東南山水美。未有若明光。惜乎數千歳。奇詣無一章。吾今傲雲月。斗酒攪枯腸。安得李太白。百篇共商量。

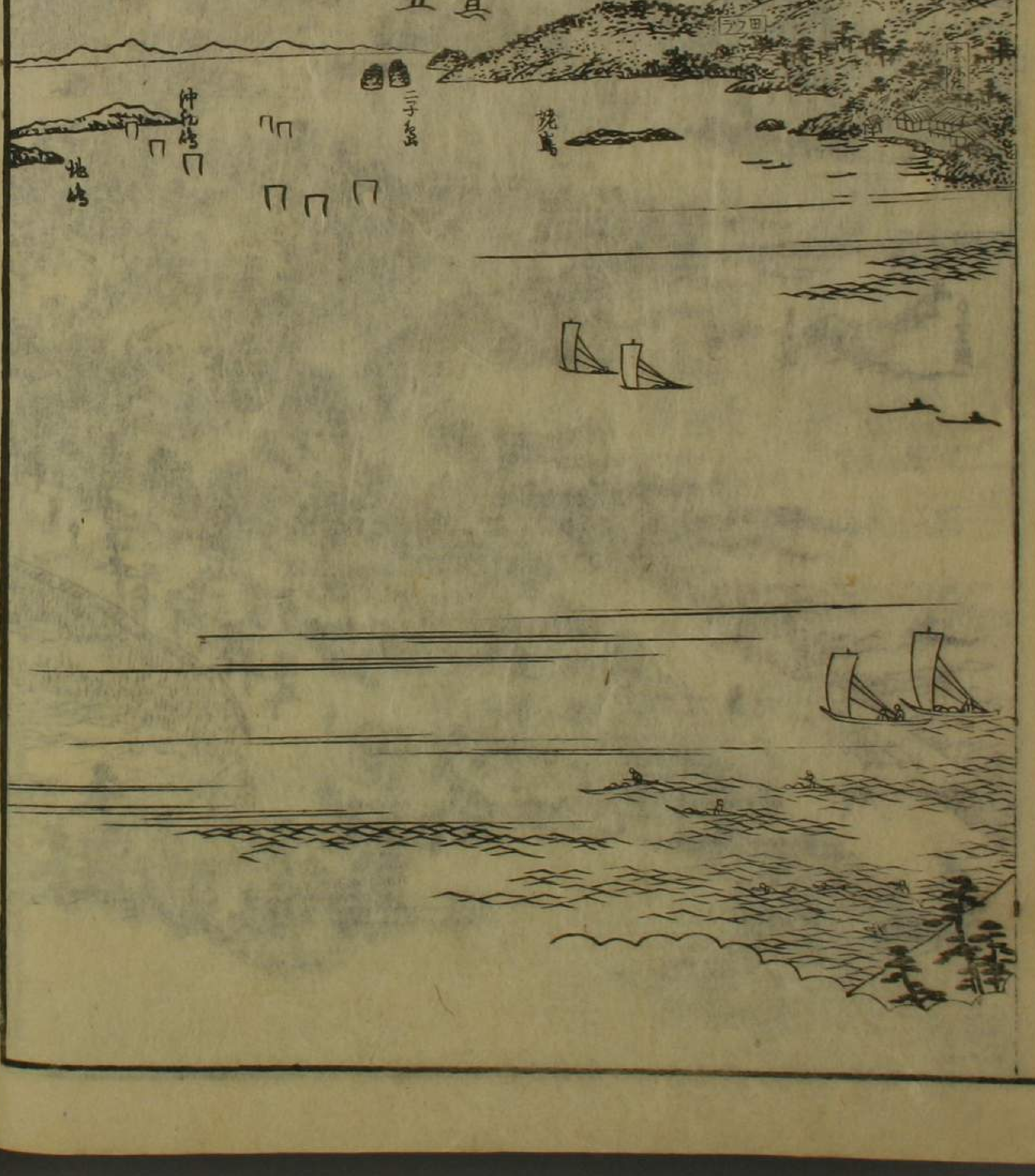
祇南海

題和歌浦圖

明光浦上幾回去。美景今入屬兔毫。今日觀圖詩思動。卷舒吟誦意陶陶。

伊藤蘭嵎

其五



和歌浦東照宮

同

おきつしほみちくる松原田鶴のなく塩干のかたに立霞かな　入道左大臣

雪玉集

雪ふれは和かの松原うつもれて塩干の浦の冬そさひしき　雅永朝臣

和歌御宮

同所西の方にあり。御別当和歌山天曜寺雲蓋院。天台宗にして本尊薬師如来を奉安す。

本宮奉拝御神 三座　東照大権現　日吉山王権現　摩陀羅神

拝殿あり　鰐口三口

唐門　本社のまへにあり。極彩色の花木と彫刻し、いと人目をおとろかす。

楼門　沙道の中ほどにあり。左右に随身を安す。

御供所　唐門の東にあり。

三重塔圖　本社の東にあり。本尊大日如来。

護摩堂　楼門の南にあり。五大明王十二天等を安す。

薬師堂　本堂の西にあり。

開山堂　大僧正天海慈眼大師の像を安す。

辨財天祠　御橋の東にあり。

御橋　打桐擬宝珠あり。

石華表　銘曰。東照揚日。華表劉石。維明維堅。萬世無斁。

下馬標

下馬橋

當　御宮ハ元和六年庚申の歳に御造営ありて比叡山大僧正慈
眼大師の開山たり御本地ハ薬師瑠璃光如来にまし〳〵て相殿にハ
摩陀羅神および日光山王権現立せたまひこれにならべて
東照三宮と称し奉まつる恐畏をいへども　神君御在世の御時とも
今をもつて追々思ひ奉るに天文元亀の間天下擾乱して武将其人
に乏しく近くハ織田豊臣の両将争ひ起り後につゞいて無事ならず
属しといへどもまた是武に偏ふして文に疎く竟に泰山の安きに
すゑおかるべき末葉なく兼臣の和やかさんぞなすことひ乱きざ
むといふ此ところにおいて
神君勃然として起らせ給ひて戎衣しながら兇徒を平げ給ひ
干戈の霜を朝陽に消し長く民草の栄を春風に靡せ給ひて
たとへバ虞淵にしづめる紅輪の峰をこひ扶桑に輝くがごとく
御徳ハ　御神号にもいちじるく

御影のてらしませる陰ハ尽きぬ　御代々に宮の榊ハ長く
亀の尾の緑の色とおなじくそひ路の警衛をまもらせたまへり　威徳を
仰ぎまつるくね草木の　恩沢にうるほふおほんなりや　御宮の結構ハ
申すも恐多けれども麓より山上にいたりて石階左右にならび
朱の玉垣奥深く林巒の積翠に映じて一段の幽邃を醸し
神威おのづから厳にそなはりまします所の霊地なり宝殿ハ山上に建て
三葉四葉に吾をなし美を尽し輪奐としてしかも諸人の眼をおどろかし
尊く厳然の桜花ハ二荒の山よりうつし来りて紫栄の色香を
ちる花の春ゑに傍る松樹ハ千ろ松原のむかしをのこして秋の
翠色いろなし

御祭礼之事

毎月十七日　楽人奏楽九月十七日御山の宮にて廣小路にて相撲あり
就中歳中四月十七日の御祭礼ハ自余の式にハ事かはり御山の

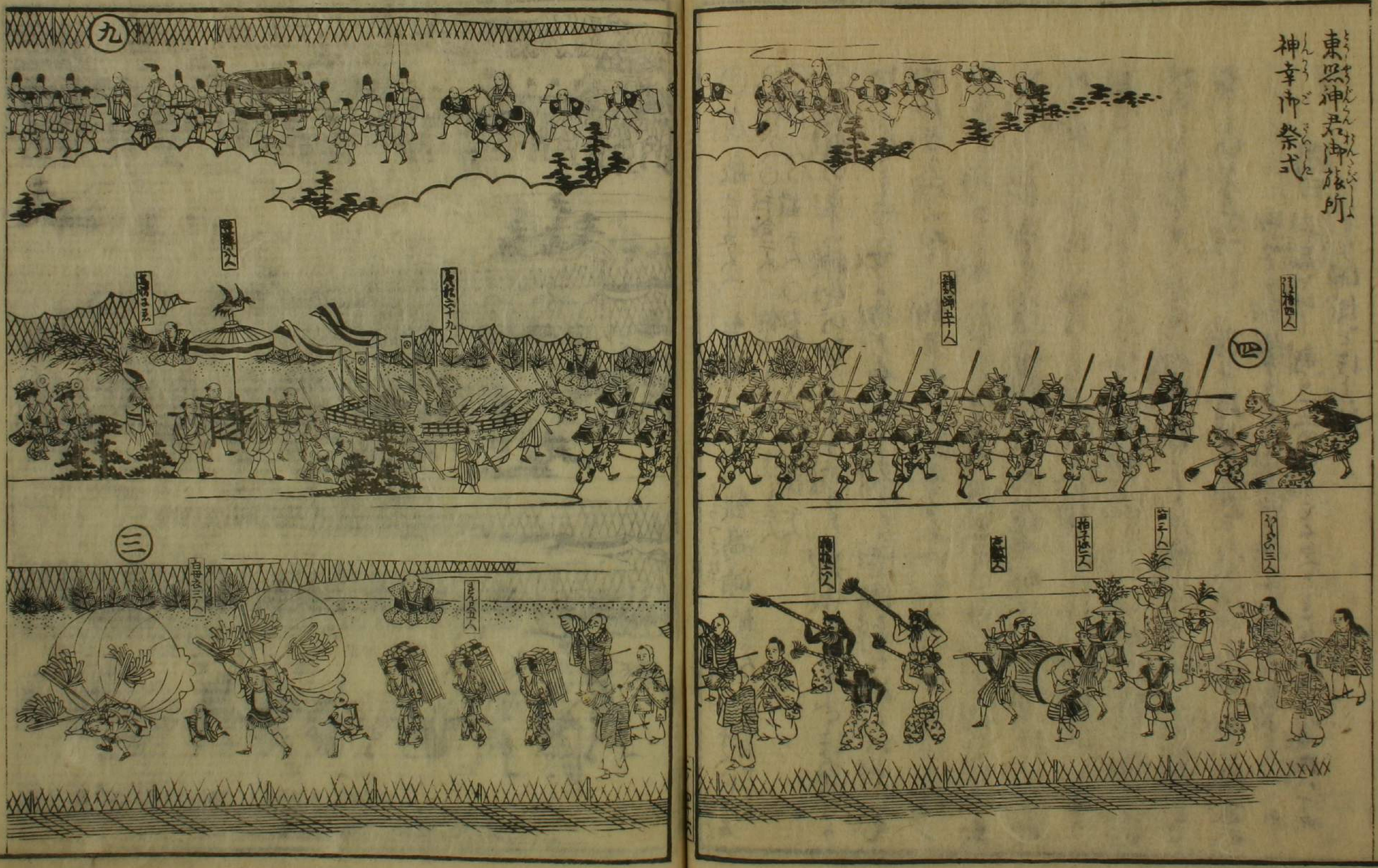
ぬるまで御旅所まで拝参を忽ちなるべく誠に惟とこの地も
なく都鄙の老弱袖はなれて帷は陰を取りて幕の如く
あれ字まで雑沓するありさま比ひなし
御神輿の渡幸は当日辰の上刻にして洲崎御旅所へ遷楽と
参りしく神慮は穏やかなる供奉の行列の花満れして枝
挙するをあさはかならずとも尤其壮観なるものとなんで

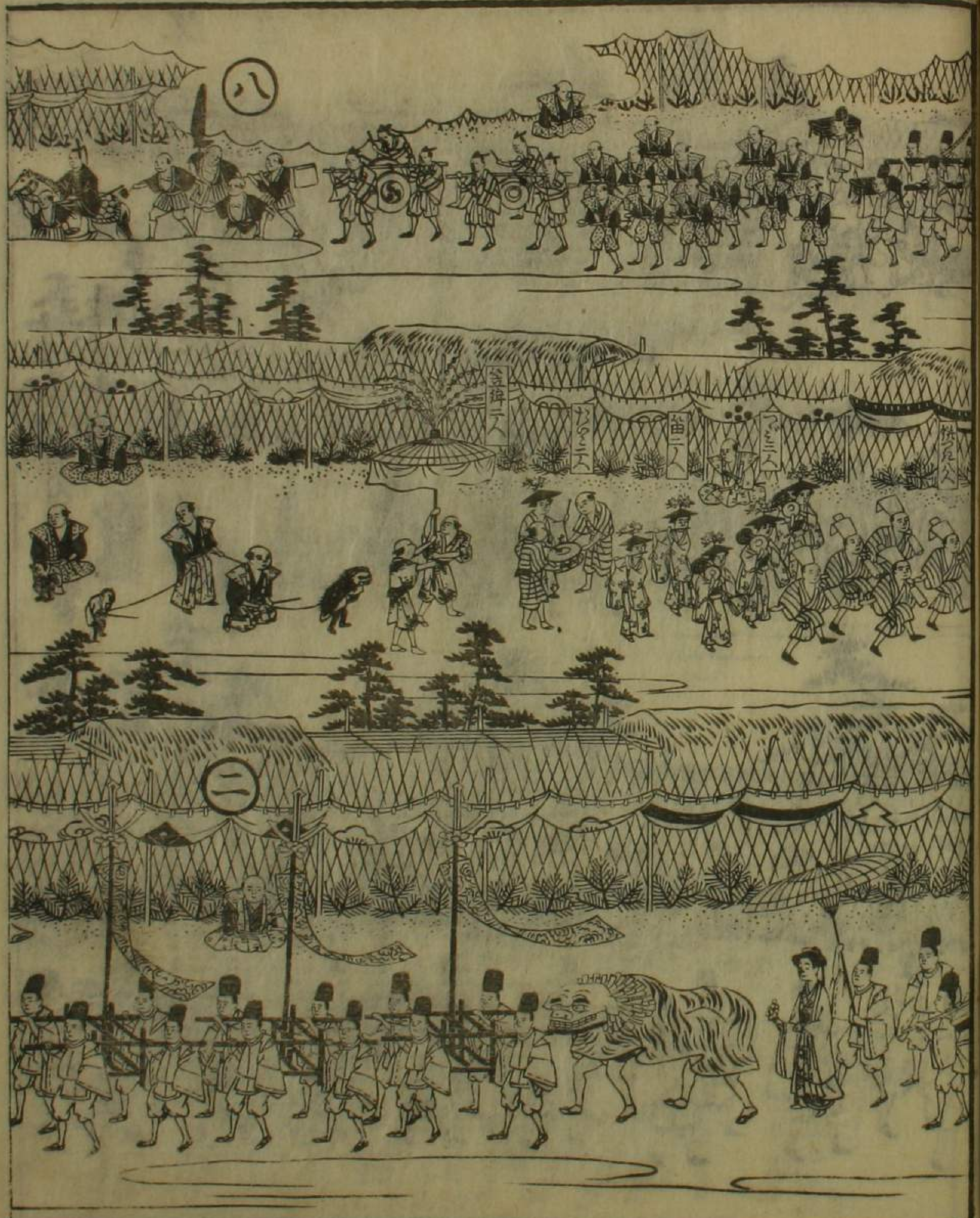
○長刀振 十二人 示作 ○赤母衣 七人 白母衣 六人 雀作あり
○連尺 五人 ○棒振 六人 ○太鼓 二人 ○拍子鉦 弐人
○笛 三人 ○螺吹 二人 ○浮拵 四人 ○雑躰踊 五十人

此おどりのくわれ口脚に実説をたづぬれどそれ催後の興をはしらく春にして浴然
の逍遥人呂律の志べて面白く面白き名曲とはれは深くこころを和し拍子にて浴
楽の耳目此おどりにとどまる実や今のふしは人和合のうちなりとも神慮の遷宮とまき
ますもおもひ奉る心のおどりゆゑにたえなる佳節に其時にはかる式の祥事あまよ
あらさまに天楽もあなかしら舞もうつくしげにあるべきとぞおもはる世よりうつ
とれよりかはる遊楽の壮観とも日にはおもしろきさまにまかした古雅似て素なれ
さびしく万代に至るの行くきもに陰ま行よいる御代の神徳なりとれあらかうた
ならふくあふぐたらくまつるぞかしんや

○唐船 二十九人 ○笠鉾 八人 ○餅搗踊 数六人 ○烏帽子 流石 六人 ○浦手 二十七人
○杵引 八人 ○手合 二人 ○餅搗 八人 ○浮く手 三人
○揚花 二人 ○笛 二人 ○太鼓 弐人 ○笠撥 二人
○夫餅の事は神代のむかしより始りて先哲もいまだ詳ならず
なれどいまで世に持来りて久しく造酒並びに神への中にも
下戸なる神はゆるく納受ありし事なるゆゑ此餅は搗くも神供に捧る
にもなく丸めて市中にひさくにもあまたれ五風十雨の順にして民の太平楽
を模して雀躍する体の京の拍子と合せ嬋娟たる鬢は楊柳
なる紙かあれば物くはゆるに女房男子は紅粉の粧ひを借り
是を手合の婦として八人の杵持男数く餅搗園太鼓の役々を
おのく所作するとぞ凡拍子にはうしろに催すさせ踊る盃の会を
まなしむかし築べつじて興すぬあつて戸さる御代の泰平を面白く仰ぎ奉るなり

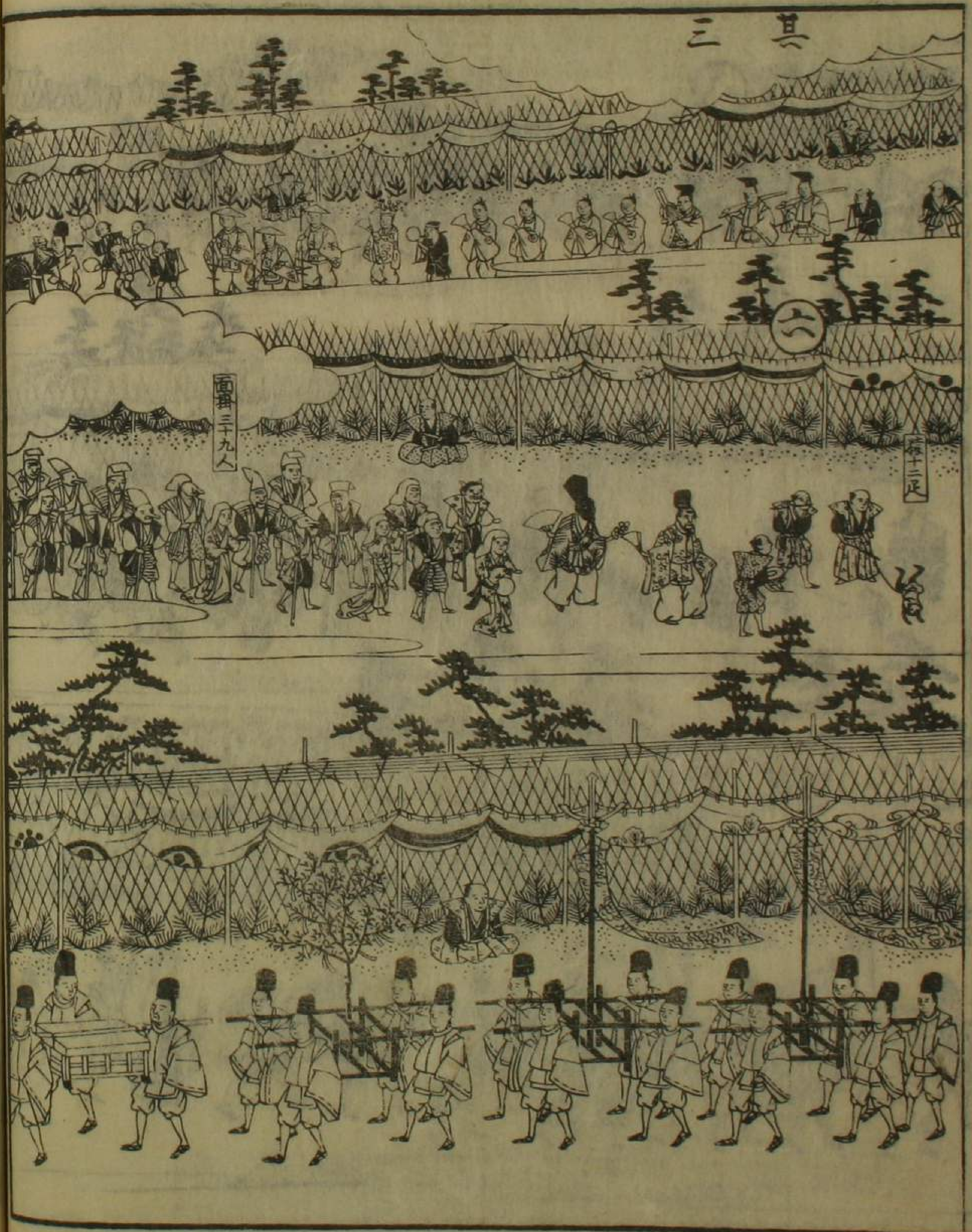
図曰 此おどり中絶ありしを寛政十二申の年の春山青霞たなびくもの
其旧をとぶらひ新に一二の作手をくはへて是を再興し広瀬八丁町
より此役をはたしぬ。

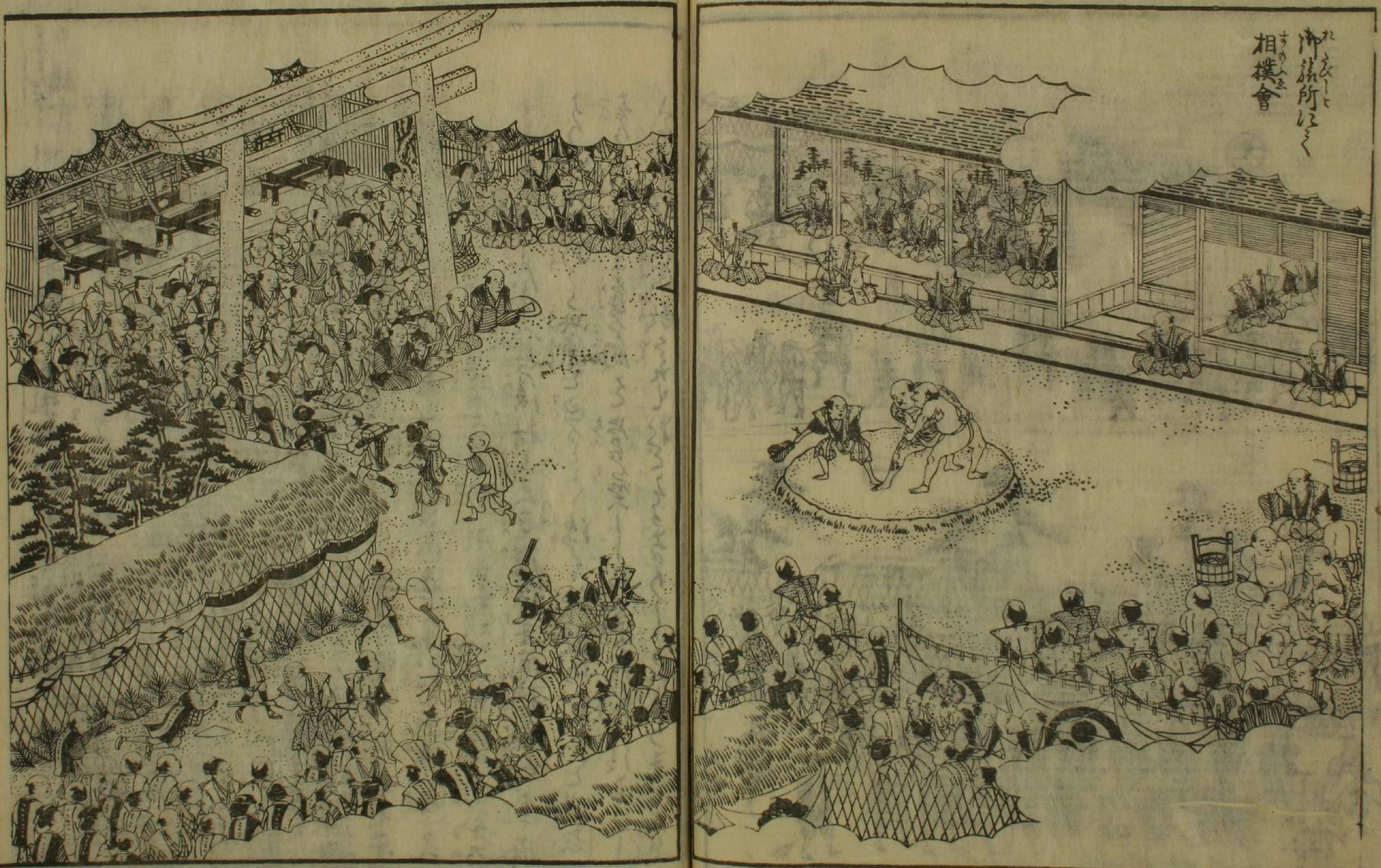

東照神君御旅所
神幸御祭式
九
三
四
白母衣三人


八
笠鉾二人
笛二人
二

其二
五
手合二人

七
一


其三
六
猿十二疋



御稽所にて相撲會

天満宮　陳思宮御宮の西の山にあり　正殿　菅神を祭る　拝殿　歌仙の額あり　三藐院の御筆なり　楼門　額を扁して高陽門といふ　末社　二宮荒神　白山稲荷　伊勢両皇太神

牛の画　楼門に扁額のごとくかゝぐる画なり　九日塩屋小兵衛といふもの奉納す　画の下に貞享五年四月　その頃京の画工にて甚だ妙手なりし原の某が筆と聞えしが　ある時その絵の牛夜な夜な出て田を荒しければ　人々あやしみて絵に綱を画き添へしとぞ　今に其あとあり

観音堂　天満宮の南にあり　本尊観音は菅公の作なり　延喜元年

社傳旧記に曰高岳社は日域三聖廟の其一なり　菅公嘗て筑紫に遷され給ふ時　此浦に御船を寄せ給ふとぞ　佐倉(?)津流保朱之陰馬夫毋玖也之発者和歌吹上和歌浦乃安久牟乃　とあるは其後村上天皇康保年間橘直幹宰府に参詣のおりから此浦を過るとて　神の遺跡たる事を聞て　社殿を営み神像を安置し　遠近崇敬せざるはなかりしとなん　されば是より先既に西上人の撰集抄にも載られたり

かくて星霜幾多にして天正の兵火に社頭ことごとく烏有となりしが　慶長十一年浅野左京大夫幸長ふたゝび新たに営造ありて神田を寄せ奉らる　則今現在する所の社殿是なり　かくて元和七年

國祖君当山によらせ給ひ　東照神君の霊廟を創建ましまして　当山の社をことごとく地をも寄せ　又神田を増加して神威を光耀ならしめ給ふ　さればいよいよ世に

國君の崇尊によりて霊応ますます炳然たり

重建和歌浦菅神廟碑銘　藤斂夫

於乎神。姓菅。三其字。諱道真。世曽儒宗也。云云。南紀和歌浦置菅廟者。遠代尚矣。今國主豊臣。姓浅

野氏幸長公就昨土之封之五年。相舊制之隘陋而於邑不措焉。然神之主先成民而後致力於神。鑿開兆域。依崖壁疊鉅石。踦攀崢嶸。百工子如來。祠堂不日以落矣。刻畫華彩。丹漆黝聖。延袤之壯。然觀集目若狄梁公毀江淮淫祀一千七百區。所存者惟夏禹伍子胥二廟。君子猶以為存伍子胥廟未是。固主之於此廟。可毀乎。以新焉。可廢乎。以崇焉。所為可哀也已云。

これハ慶長年間淺野家より再興のことなさるところの碑なり ありけれども史へあらハれぬことおほかりいまあるもの也

羅山詩集云。倭歌浦天滿宮者。未詳其草創之時世也。其從來已久矣。或曰。橘直幹自宰府皈京師時。過此浦而始崇奉焉。今所存者淺野幸長之所改造也。頃歳滕惺窩應幸長之求而作廟碑銘。然有故不建碑云。菅氏家風儒者宗。靈神今古仰遺跡。西都北野南

湏浦。三處祠堂一色松

和歌浦

今西南に出る浦なり上古ハこの洲ありて一つゞきの干潟となる

浦いわれ浦 清少納言枕草紙に見えたり

万葉　若浦尓白浪立而奥風寒暮者山跡之所念　藤原卿

同　若乃浦尓袖左倍沾而忘貝拾杼妹者不所忘尓　作者不詳

續拾　老の浪よせじと人ハいとふともまつらんものをわかの浦なれ　連敏法師

詞花　若浦や久米の佐ら山と思へども若の浦とぞ云へりける　大納言師頼

同　若の浦と云はかりにや風ふく波のよるこそねられざるへし　贈左大臣

千載　行年ハ波とともにやかへるらんおもかハりせぬ若のうらかな　祝部成仲

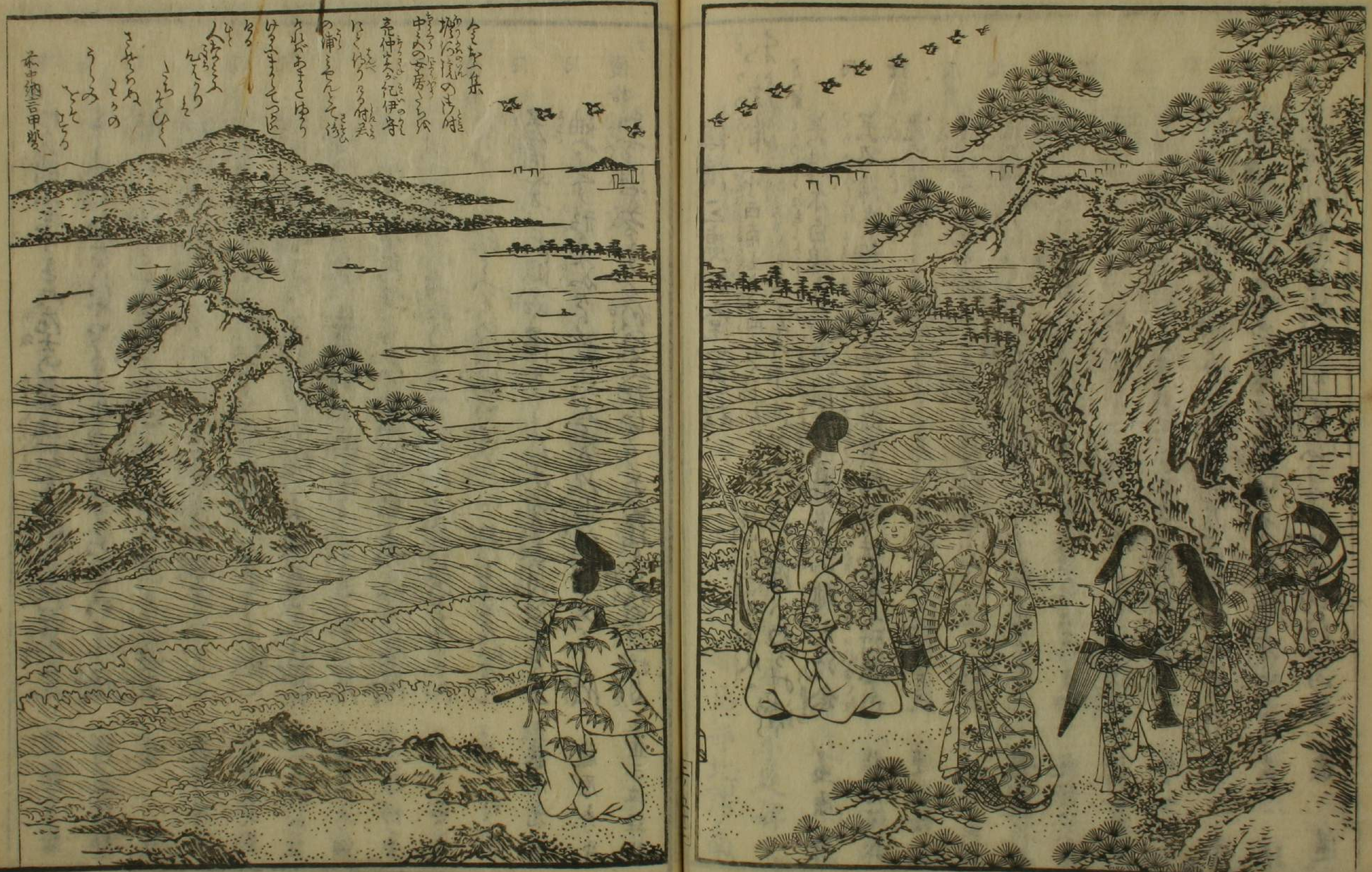
新古　藻塩草かくとも尽じ君が代の数によみおく和かの浦波　源家長

同　和かの浦家の風こそなけれども波ふく色ハ月にみえけり　民部卿範光

同　若の浦に月の出しほのさすまゝに夜なく鶴の声ぞかなしき　慈圓

同　若の浦や沖つ汐あひにうかび出るあはれ我身のよるべしらせよ　家隆

同　若のうらをまつの葉ごしにながむれば梢によするあまのつり舟　寂蓮


金葉集
堀河院の御時

新勅　わかの浦にしつみし海士の藻塩草かきつくしても朽や果なん　法眼宗圓

同　もしほ草かきおくやいかならん我身をしらぬわかのうら浪　行念法師

同　契おきし契のうへにそへおかん和歌の浦路のあまのもし木　俊成

同　和歌の浦に塩木かさぬる契をはかける焼藻の跡にてそ見る　西行法師

續後　わかの浦や塩干にのこすちとりむかしの跡を見るもかしこし　前太政大臣

同　和歌の浦や四方のもくつをかきすてゝあまのしわさの跡や絶なん　正三位知家

同　若浦やたえてし跡の藻塩草かくすてゝまさりやくちなん　藤原為綱

同　わかれ草かきあつめてもひとつなに行末もしらぬわかの浦風　藤原師季

同　さても世に和歌の浦路のわか草いかにしけれは波のよすらん　平泰時

續古　なくしも跡に見の浦わにうつる波にたちそはれなん　平時直

同　若浦や志らぬ波路に漕出てよるへもしらぬ月をみるかな　藤原光俊

同　袖ぬらす形見なりけりかきすてし昔の跡のわかのうら波　藤原秀茂

續拾　和歌の浦や蘆辺をさしてかへる波のうへにひかりある秋の夜の月　正三位経朝

同　わかの浦に聲をしほみ浜千鳥跡をかくしてあらはれにけり　藤原泰時

前大納言為氏玉津島社にて歌合し侍りけるに　浦月

同　若浦の波の下草いかにして月にかはらぬ名のこさん　権律師定為

同　和歌の浦にむすひつくたく藻塩草波のしたにも集ましかは　為家

同　絶もせし昔の代々の跡とめて立かへりける和歌のうらなみ　道洪法師

新後　和歌の浦に積雪もかはらてや世々にあつめし跡は見ゆらん　前関白太政大臣

同　わかの浦や五代かさねて浜千鳥ひとりしも跡はのこさん　為世

同　家代々に集ね和歌の浦千鳥空に名たかきあとのこさん　院御製

同　よひのまにみちくる汐の芦分ふきにしも果ぬわかのうら松　津守國助

同　芦原のあさくなりにし方よりもよるへもしらぬわかのうらなみ　入道前太政大臣

同　若のうらに独老ぬる夜の鶴の子の為にとそ音を猶なかれ　為氏

玉葉　和歌の浦やあまり久しき名をとゝめわか子の代まて田鶴もすむ　関白前太政大臣

同　その浦に夜を迷ふなる鶴のこのよそに聞ても音に泣れける　前兵衛督為教

玉葉

同 和哥の浦に跡付ながら濱千鳥名にあらはれぬ音をのみぞなく　中臣祐信

同 古の和哥の浦路のとも千鳥あとなき跡のことの葉も哉　津守経國

同 つたへくる心の中のすゑまでもみすてぬ和哥のうらなみ　平貞俊

同 此巻にあつむる言の葉となるや代々の跡ある和哥のうら波　藤原景綱

同 藻塩艸かきおく跡は和哥の浦にあはれをそへてこの世にもなし　藤原忠定

續後拾

同 集めおく言の林ちりもせず千年のかげにわかのうらまつ　法皇御製

同 うれしくも我和哥の浦にすむ身とて袖の名をそへ思ひ出にせん　平貞直

同 かきすつる露の涙もかぞへてむしろ和哥のうら波　源高氏

同 数ならぬ身もしほくみし和哥の浦の跡にはかなく名をや掛なん　藤原範秀

同 言の葉の代々も知らで跡をたづねたる和哥のうら波　大江高廣

同 うき身をば袖にかけても世を経ける跡をのこせる和哥のうら波　侍従隆教

同 代々の跡思へば和哥の浦千鳥うき身の方にて音もなかれける　前中納言定資

同 和哥のうらに世をかさぬる老の波まで立かへる道ぞうれしき　丹波忠守朝臣

風雅

跡とめて古きをしたふ濱千鳥和哥の浦にぞなくなくもなく　紀行春

皇太后宮大夫俊成千載集えらび侍りける時よみ侍りける

同 藻塩艸かき集めたる和哥の浦のあまの手にこそ思ひ出けれや　前左兵衛督雅方

同 又

同 今も和哥の浦に跡をしのぶる老の身にわかるる和哥の浦波　俊成

同 いにしへのあとをしのびて渚よる和哥の浦波　平久時

同 和哥の浦の波の数にはあらずとも心のうちに思ひ出にせん　後徳大寺左大臣

従三位頼政正五位下に叙して侍りける時よみ侍りける

同 和哥の浦に立登る波の音にこそ我も嬉しき　藤原隆信朝臣

同 又

同 いかにして立のぼりけん思ひよる和哥の浦波　頼政

同 古もあまたの和哥の浦千鳥今もかはらぬ名をのこしけり　源宗氏

同 君が代はあつむる和哥の浦千鳥あとをのこして　前大僧正道玄

集来し代々の跡とふ浜千鳥かきもらさしな和歌の浦波　御製

同　和歌の浦の夕波ちとり立かへり心よせてふかくもある哉　大僧正賢俊

文治五年玉津嶋歌合に和歌の浦によする浪といふことを
返すへき人やよからし為家卿とよみ侍ける

同　尋ぬる和歌の浦路の浜千鳥あとゆくかたに道しるへせよ　紀淑氏

同　立かへり波はあれとも浜千鳥ふるき方をそ和歌のうら波　前僧正道性

同　和歌の浦や道をまよふ浜千鳥跡みる人もありやなしやと　尊圓

同　わか心ならはあと浜千鳥いかにして跡はけふもなく也　大僧正道順

同　和歌の浦や道を尋ねて名もしらぬ浦路にまよふ我身成けり　藤原頼時

同　和歌の浦や汀の田鶴の声からに昔を今にしのふ哉　津守國夏

同　今よりは家の風にそ伝ふへき名をかけ初むる和歌のうら波　祝部行氏

同　手にとりて詠めし言の葉をかきつくしぬる和歌のうら藻　権大僧都叡縁

同　名をかけし浪の跡とて藻塩草かきあつめける和歌のうら哉　示證上人

同　和歌の浦にたよる波の名をかけて世々にのこさん跡のしるしそ　従三位為子

四海すむけるしるしに出にけりかきあつめぬる和歌のうら藻を　法皇御製 光嚴院

同　わか方に昔の浦の色ふかくよするも波のたよりをそまつ　等持院贈左大臣

同　和歌のうらや其人数にあらねとも跡をもとめて今にぬる哉　大納言顕實母

同　いかにせん昔のうらのことの葉を伝へてたに跡をたにせす　法印浄弁

同　数ならぬ身のおもひの深くてもかく心ありける和歌の浦波　惟宗光吉朝臣

同　和歌の浦にまよふ身の道あるにはむかしの跡をふみもまよはし　藤原雅顕

同　わかの浦の波はさなから浜千鳥今も昔を恋つゝそなく　行兼法師

同　和歌の浦にたかへし舟の縄手繩引人あらは道もまよはし　性遵法師

同　昔の浦や昔の浪の跡にしも身をよせて世の道に迷はん　法印貴清

同　わかの浦によるよしかなも神代より伝へしことの葉をそたのむ　正三位経家

同　人なみにおもひよりても和歌のうら跡をみるにも友千鳥哉　二品法親王尊胤

同　人しれぬ心のうちもいはて浜千鳥おもひ入ぬる和歌の浦波　信快法師

同　昔のうたの心のこさぬ浜千鳥跡をとゝめて世々にあらまし　正三位通成女

新千 和歌の浦にいりて果てにし捨舟も今ぞたちかへる世にひかれて　藤原為氏

新後 和歌の浦に身をひろふ友千鳥心の跡は何かしらまん　前中納言親賢女

同 老いぬれどよ和歌の浦の浪にまた友千鳥人数の名をもとめゆく　三位為永

同 古の跡ある和歌の浦ちどりたちかへりても名をや残さむ　小槻匡遠

同 尋ねくるよ和歌の浦路の友千鳥立ちわかれゆくあとはふみ　藤原高範

同 和歌の浦の松よ緑の風の音に声うちそへて鶴ぞなくなる　左大臣

同 藻塩草かきおく跡や八十にあまる和歌の浦波　一品法親王寛尊

同 沈みにし今さら和歌の浦波によりやよせんあまのすて舟　鴨長明

同 及ぶべき浪もあらねば松が枝にかくるみよ和歌の浦のかひ　よみ人しらず

同 和歌のうらや羽うちかはし浜千鳥浪ふみわけて跡やのこさん　順徳院御製

同 老いぬれば身の跡は世々に跡たえん和歌のうら波　為重

新續 和歌の浦の跡をも添へよ友千鳥ひとりかへらんうきよなりとも　後八条入道前内大臣

同 わかのうらに集めしみくさ跡の道ある御代に光添へなん　民部卿為明

新續 人とはぬ和歌の浦にも千鳥なく千鳥絶えぬ跡をも世に残さばや　源経有

同 和歌の浦や老木の松は年ふりて年もふりぬる跡をとひける　前大納言為定

同 立ちかへる和歌の浦波すへらぎの代々のためしに寄るとかや　左大臣

同 ことの葉の人の心も今もなお昔の人をのこしまつ　讀人しらず

同 立ちかへる五十ぢ余りに和歌の浦波　前大納言実継

同 和歌の浦やうらやむ代々の跡を見て墨染の袖ぞぬれける　大納言為邦

同 昔より和歌の浦波代々に跡たえぬ人のふみも絶えせぬ　三位為継

同 さいかにも知る代々の跡よりもなほ和歌の浦波　権中納言雅世

同 和歌のうらに名を残してや年を経ん心ありける人もあれなば　紀行文

同 和歌の浦に身は七十路の老の波立ちかへりてもあはれとぞ見る　前中納言雅孝

同 和歌の浦や風を波の音にもみなれつつその跡の跡ぞ　藤原秀茂

同 とはれぬる道をこえぬ和歌の浦に住む跡の身やいかならん　法印秀運

同 和歌の浦に千鳥も深く藻塩草かきつめる世をすくへとぞ　後京極摂政前太政大臣

新續 和哥浦に和哥の浦波よする代をあつめや道の跡もなしけん　法印宗助

堀川 わかの浦の干潟をさしてなく鶴の雛そあとをたつねける　公実

夫木 和哥の浦へなきゆく鶴の鳴声のきこえさりける心あるらん　良風

和哥のうらにたなひく霞おきつ波

同 わかのうらは藻塩にあまのかりつめるかひある世にもあひにける哉　前大僧正行尊

同 わかのうらやおきの塩あひにうかひ出るあはれ老の身なきはかなさ　後九条内大臣

同 ゆふなきに満くる潮のいかにして和哥のうら波　大納言通具

同 君か代はなほありあけのよるもなほ玉津嶋わかの浦ちかく　寂蓮法師

くものうへまてのほりける

同 和哥の浦にむかしの跡をたつねつゝ玉津嶋月の波にやへの藻風　前中納言定家

くものうへまてのほる代にもわかのうらとつれ

同 白波のよりくるほともわかのうらに入江のうらをみそなはる　六條院宣旨

同 わかのうらや塩路をさして行舟のはるかにみゆる月影　後京極摂政太政大臣

夫木 和哥のうら吾老のわかれのなき身をもなきそふ鶴の声をきく哉　信実

同 かくはかりのちをかさねてわかのうらに和哥の跡をもとめてこそ　中務ごのとこ

六百 わかのうらに老をわすれて玉津嶋のあまのもしほのかひもなき　左 兼宗

林葉 玉津嶋老をわかのうらの松の風にたちよりて和哥のうら波　俊恵法師

家集 わかのうらに秋の夜なかき月を見てわかの浦波にたちよらん　法橋顕昭

同 わかのうらの浪にしつめる舟人のはやくもあらぬあはれをそ　赤染衛門

拾玉 副哥 東をは君か住家とさためてもなほわか浦にたち帰りなん　慈鎮和尚

同 千代をそへて又八千代わかのうらのかすみと見えける和哥の浦かな　頼政

同 わかのうらに藻塩やくなるあまの子も知るやうたの道のなさけを　湖子九

仙集 わかのうらのあまのたく塩やいく千代をかさねてかよふ田鶴のなく声　後鳥羽院御製

老若 君か代のはるかにかよふ和哥のうらのなみをさそふ霞のうらかな　雅経

瓊玉 おさまれる御代にふたゝび遊ぶてふ道もしるしや若の浦風　宗尊親王

民部卿為家卿宰相中将にて侍りし時住吉の社にて歌合し侍りけるに名所の松といふ事をよみ侍りける時、浦の祝といふ事を

草庵 和歌の浦やむかしにかへる波の岩こすまでにみる人ぞなき　頓阿法師

同 くもりなき浪の光にみがきける和歌の浦わの松　牡丹花

百首 わかのうらのかげもたえせぬ和歌の浦松　肖柏

文明 若の浦の波のかへるも大和の草ものこる和歌の浦の心ぞ　実隆

称名 閑寂し和歌の浦風見わたせば遠の松ぞ　宗祇法師

碧玉 春の和歌の波世のなか花の宿の初春もよし　政為

菊葉 和歌のうらに遠くたつ心にしみて我身の道をたのみつゝ　二品親王尊胤

同 春くもかならずまかせて和歌の浦にしほ　為大納言中大夫

紀州雑詠遊和歌浦　藤肅

遨遊諸客海城傍。斂灔水光連彼蒼。出網跳魚新撥剌。一聲欸乃送斜陽。

和歌浦排律　林羅山

弱浦昔聞名。今看猶眼明。螺粘疑石出。蟹走訝錢行。松下有漁到。蘆邊奈鶴鳴。堆堆鹽竈冷。處々草苔生。土腴如蜀府。潮去似盆城。衆興郎吟発。山青水自清。

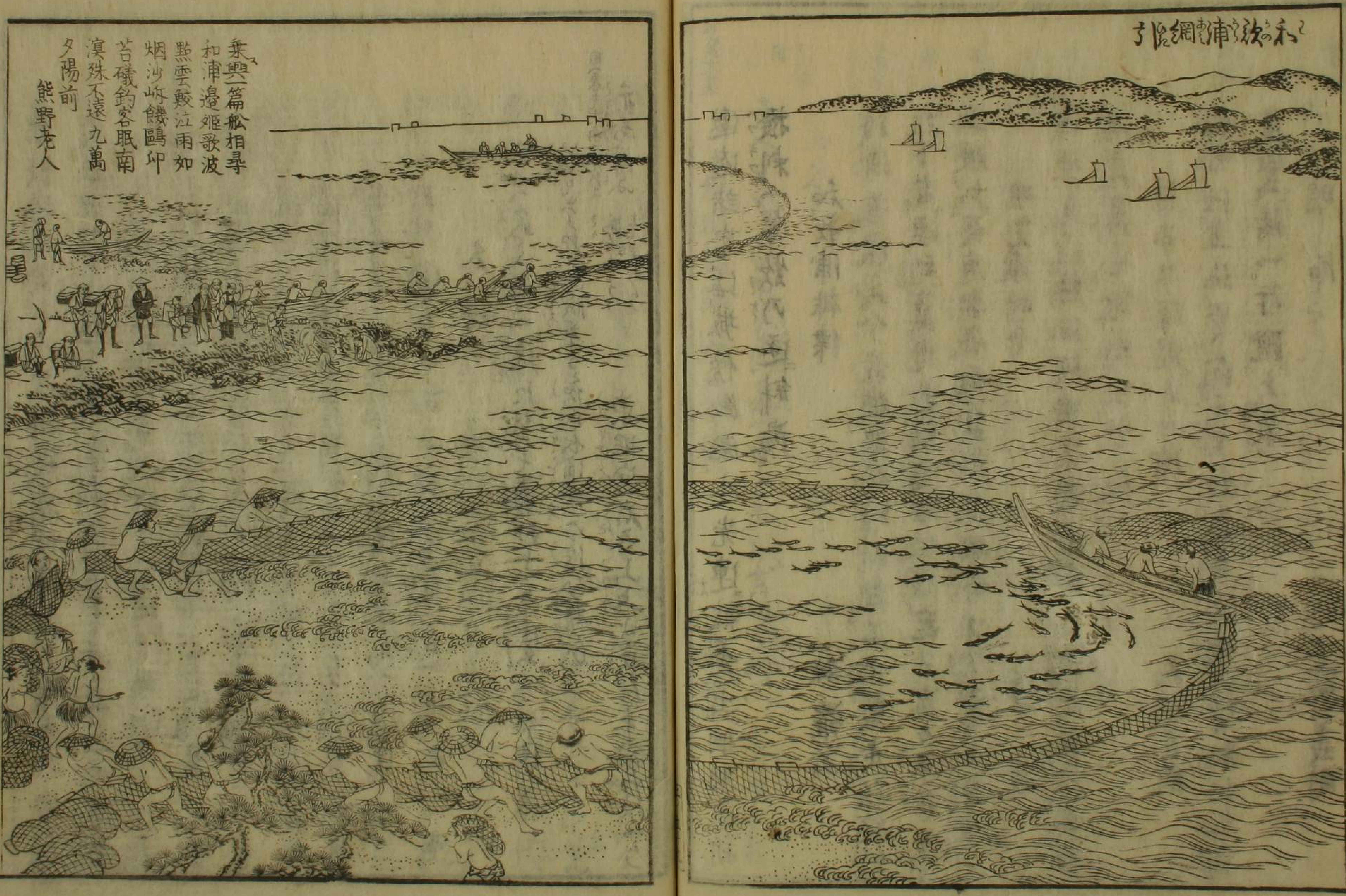
明光浦眺望　東涯

雨岐爲門倚海涯。明光勝景素相誇。天風忽自南溟落。萬頃銀濤吐雪華。

遊和歌浦　大江玄圃

和歌江上海雲開。千里秋高気爽哉。落日數行辞鶴度。驚濤一片蹴天来。

明浦　上野義剛



和歌浦網引

乗興一篇船相尋
和浦邊姫歌波
點雲敷江雨如
烟沙峙饑鷗卬
苔磯釣客眠南
溟殊不遠九萬
夕陽前
熊野老人

浩歌酔上金山舟。陳跡欲尋明浦秋。忠墳千年宮寂寂。仙妃一去水悠々。芙蓉露落青牛渚。蘆荻風鳴白鷺洲。此會相逢作何事。試将今古問沙鷗

浩磐雅

狂歌貝合

夷曲も弁のたまへし跡をんくめるわかのうらなる　若山貞亀

同

君か代は浪ちらはくゑともわかのうらにつたよる蜃もなし

わかのうら乃春乃ももくさなれまつ川　宗祇法師

流れ日も紅ちらかれや和哥乃うら　もせん

紅葉わかのうらにて追付くらし　同

波紅へ春まさ和哥乃うら乃色　槐亭

和詩

小貝ちりくく浦は綿れ翠そ霞むよもの盛　同

貝原先生南紀紀行より

和哥浦は

波もちたきの勝なる夜は衣通姫の浮む影

東照宮右乃山上にたち宮はくら

大にしく其美景なる弁鎮守し侍金壹一坊あらそろらわら
ゆらしめたまへ其景すくれたら今日は此を桜あなそ覚え
景もたとへなき様の御宮の下に和合院よ
の御霊廟あり其西雲蓋院は仮山水あり甚佳景あり声
辺の田鶴あまた詠し此は　東都御暦代
ところあまたしよし天満天神の社は　東照宮の下玉弁のうら右の有
是まさ山上にあるは社丈大なる所は東照宮の方すこ
漁人の町なと名にし和哥浦の海とられ生所沖まし地の島沖乃
佐くも和哥のうらの有名なり入海あら俗縁よりよかられなき
ことありしなし拾よ片男浪ていふる説あらる男ちなまるへし
たみあら故らは小波なら何れもよらる其縁にはせん
つちの内あそてかゝるはその浪ふたらひあるさやあるかた
うへてらく漁人はもうらる其迷ひなさとさんなあわさるら

濱辺にすゝみひさしく心をなぐさめ久しく見おくられしに、俗流の
よくれはあらし岩の常にとゝろのごとくなることのあれにつく
なひも立さはらぬ和哥のうらにまかせられ斤をなくして古哥
のよみあるは俗流の意をあらはすにまかせば濁るくちをも
意をうつせ其所あしくの方ふ田野なるに来りて人こゝろおもふ
聞も万葉集第六巻にしけなるより濁子無実なり此文字なれ
く歌の意味なり手には平安の字あらう意みちかくは濁なく作
とらへ意なりはよくなるまじくもつてなくあらしところあらうこの
なるひ万葉の本に寄し山浦の佳景聞しよりまさらく目を
おどろかして侍とけ系るをもさぶらえく浜辺に跡絶し
其ところをとはまくとなをとらうたきうはとめてまさにとの道ふ
入りて玉津しまふるは下略

源平盛衰記
権亮三位中将維盛は熊野詣の浜の宮より舟にのりて沖に出、熊野の御前にて入水し給ひけり

人ぞことくに西国へ落下らせ給ひけるも、ましてあはれなり。さればその中にも
れあはれなるところは一ノ谷の戦にうたれ、三月十五日に平家一族射られて讃岐の屋島へ渡り給ふ
わくよ御ゆきのよしをきゝ武里といふ舎人に、なくなく申しおかれたりしは、大臣殿のおんやむ
生きてかへらんことかたし、由良の浦にてつれなき都へかへり給はんとせしに、八島の城を
も一門の人々にわかれ奥しておもふことはかなく今日をかぎりと思ひさだめ
させ給ひて御名残をしくおぼしめしけるあまりのことやれもしられ
折くに志ある浦路の御船の舟出をつげて見もおくらせよ
童景御返事申けり
我意は空の風よりも深き傾月をうつしとゞめおかず
石童丸大臣殿御ともの思ひ出しかなしさのあまりにいひすてらく
王位や後の世のなりゆきぞねがはしくおもひさだめて心をくだき
さても御われのかたみのたまはせしは、あはれ此度の沖にて経をよむ
ちしく揖をとらせてはや三月十日あまりの日とて汀にたゞよひ
うらなみをこし明くればみなうらうらとしてたゞ立たる日ぞさびしき
それがしこそあらんと読みて人にわかれし紀伊国和歌の浦の浜
生きる吹上の浦をとほり給ひ玉津島の一門ともしられぬ入水なり
何となくもうちまかせつゝ、わかるゝ哀れもとほく沖のかたへ
ひろうのあはれなりし哀れ船の屋形のうちより蛍ながるゝ
そへてのほどかはまりしもうらみなく熊野の沖の浪のうへ
しかくうまつら御前に急ぎ古来のならひにて

当浦は枝条のすぐれたる勝地にして古人の多く詠ぜられし
所なり三首の和歌もあり東西九條町ありて濱辺の色濃
あしべの田鶴は波間にちどりはるかに洋々たり東方には名妙山
金剛宝寺のあれば参詣の悠揚として眺望すぐれ寄まされり
東南には生石が峯ありて蒼白の御坂翠巒ろく
うしへ摂津の浦塩津浦のみなと続きて西海小湾
四国の商船あるいは関東出船入船あまた商家の
軒をならべてあさやかなれば西南は蒼海漫々として
大鵬九萬里の羽をやすめうかぶ初嶋あり磯にみる先
うる千尋の底にあらゆる海士の汲みしをのみる世を
まつる業くれしくぼれの哀れさをそこらあら遠き地の
の山々岩根の松は緑ふかく松の浪は風に吹かれ
盛曲たる立景色窈窕として三十の美人紅粉を粧ひて

一度はわたりて誠に枝条に寄せての勝地といふべし

紹述文集

寳永巳丑之歳。八月九日。周観府城。樓堞崇麗。民物富庶。南海之一都會也。自府城西南行一里計而有裏海。有小嶋。倚巌上有亭子。可以観海傍。日妹背山。遂詣玉津嶋祠而観和歌浦。浦廻十餘里。西面稍南長岡連亘。左右環擁。地嶋漁嶋峙于南。嬈島雜賀崎突乎兆一碧萬頃。片帆如梭。風水相遇。銀濤噴雪。勢如萬馬蹴浪。海南壮観極於此矣。近村有亭。生齊酒者而供客。玩而共歩。退灘地。浪花越人。珍貝魚螺蠣之類最多。旋採而懐之。遂上菅神祠拜東照宮而歸。云云

東照宮御旅所より浦の初嶋

はこの洲崎にありて毎歳卯月十七日

この浦より沖の嶋へ神輿渡御あらせたまふ古人沖の小嶋を初嶋とよめりこの浦より見渡す沖にはつしまあり

続拾

みわたせば浪路はるかに霞めるは浦の初嶋

常盤井入道太政大臣

同

いにしへの浦のはつしま見しきの後は世にふることを

前中納言定家

新続

紀の海や沖の波間の雲をわけ浦のはつしま

大納言重光

同

入日さす塩瀬の浪の末晴れて干潟に近き浦のはつしま

従二位家隆

夫木

湊こえて塩風遠し紀の海やうしろに初しまゆくへ見えつつ

権僧正公朝

家集　和かの浦に袖ひちてこし源はなをさかのほる和歌の浦なみ　為家

柏玉　見わたせはまた霞む海人小舟和歌の浦の春のあけほの　後柏原院

雪玉　あはれなれ枕にかよふ小夜千鳥月に浦の和歌の浦波　実隆

白川　玉津島の浦の和歌にもまさりやすらん松の下つゆ　忠綱朝臣

今も又よるへきたつのそなれもち紀路に立し和歌の浦　為家

見わたせはかすみて青き松の緑かな　来山

紀伊國名所圖會之二巻終